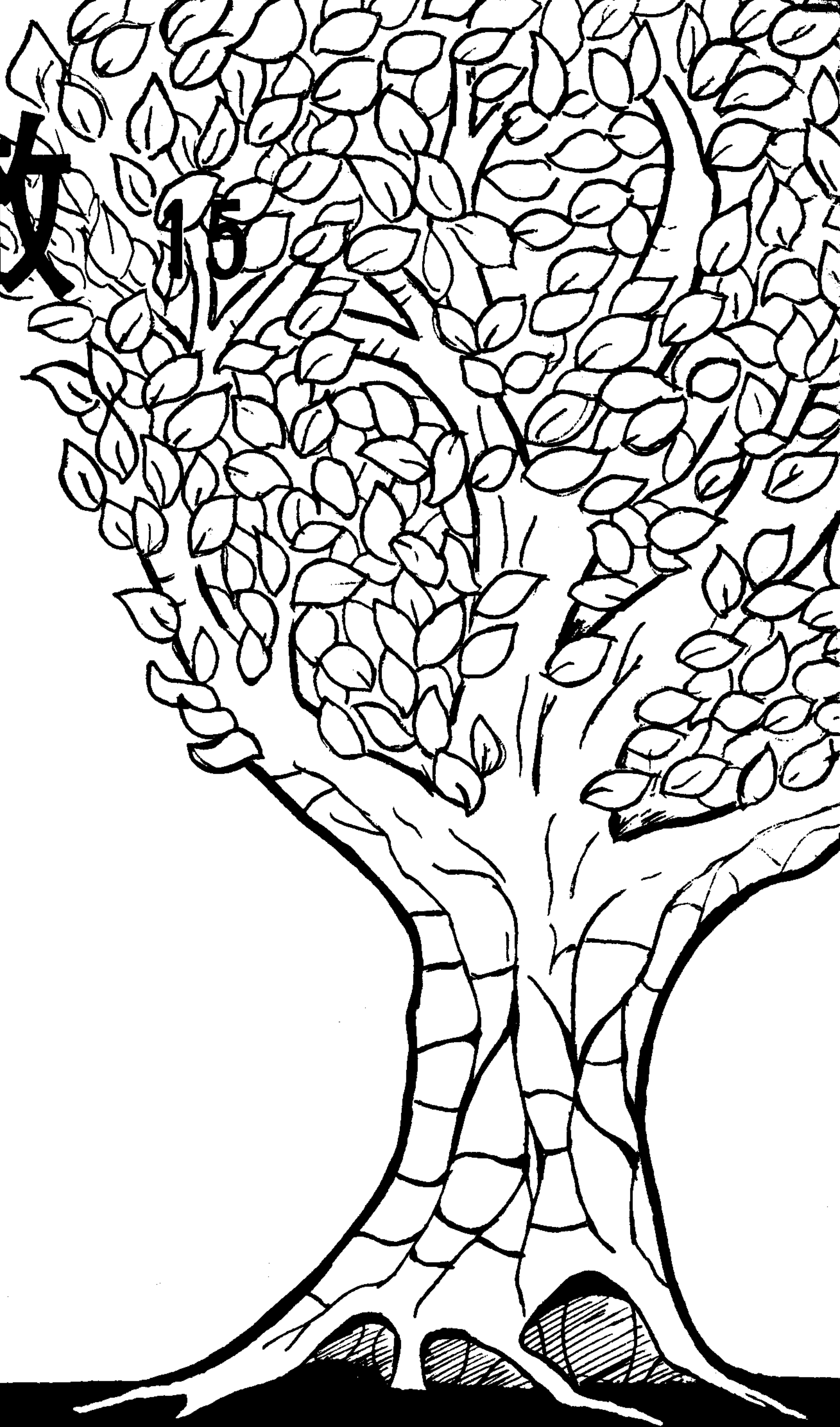


輻

15

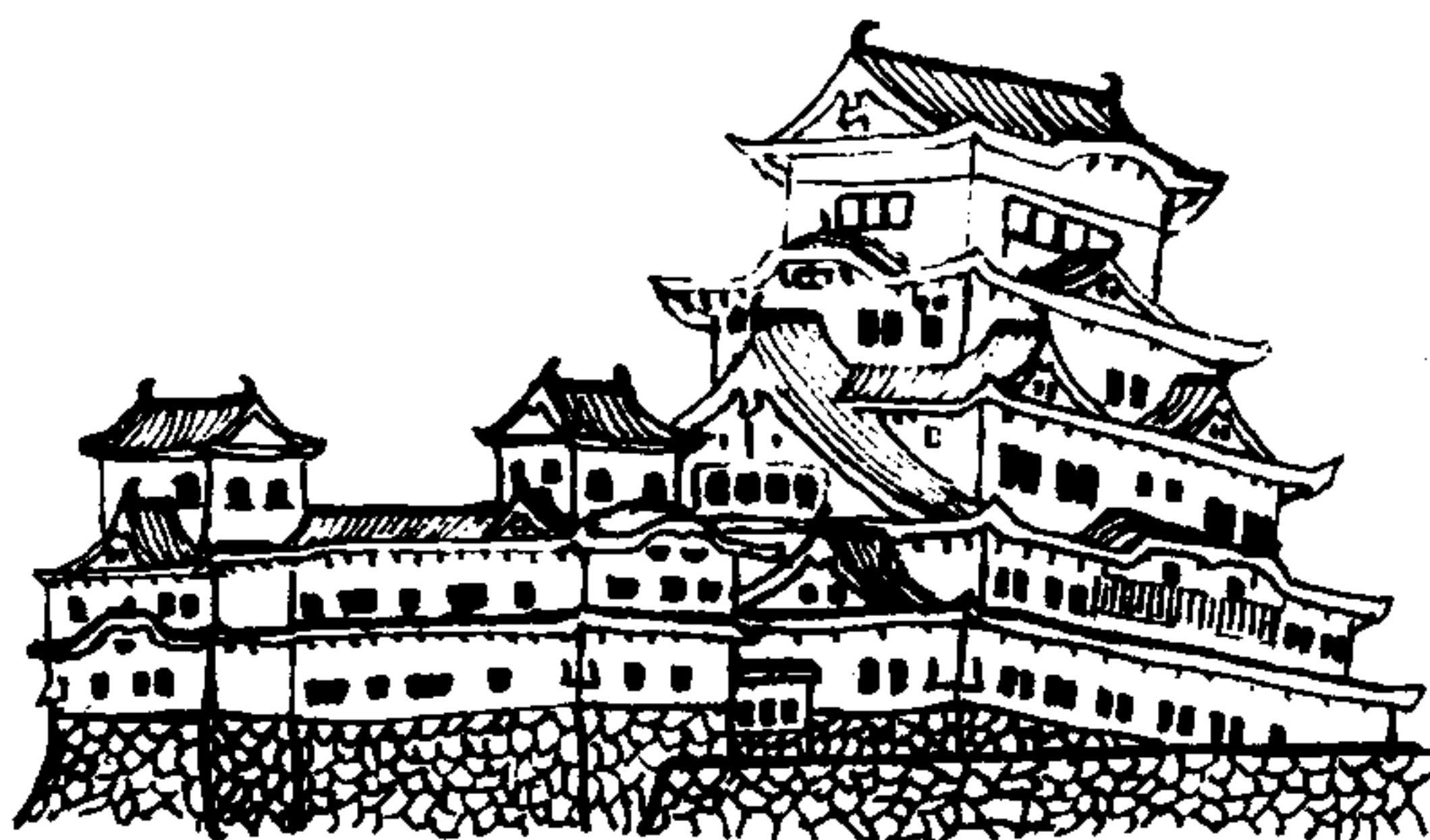


東京都立新宿高校生徒会機関誌

轍 ————— わだち

No. 15 1970~1971

東京都立新宿高等学校生徒会



ひときは高く

そびえる天守閣

白い壁 黒いいらか

不規則に並ぶ

幾何学的な狭間

美しい

しかしこの内には

鋭い剣が隠されている

ひとたび戦いがはじまると

要塞と化し

人を寄せつけない

この穏やかな姿が

変貌してしまう

評価とは……

そして真の姿とは

何なんだろう……

第 15 号

プロローグ 4

特集『評価』

座談会 6

論 文

評価について 打 田 宏 12

評価を考える 秋 山 茂 樹 13

公害問題研究会即ちよい子の

集いに関するやや雑感的かつ

極めて支離滅裂な文章 若 林 誠 14

朝 鮮 人

ぼくたちのもつ差別 仲 尾 豊 樹 19

「評価」と我々の学習

新しい高校生活を築くために 田名部 益 興 24

現行教育体制に於ける

“評価”の本質的問題 藤 記 豊 土 30

(表 紙 向原真一)

(カット 向原真一、三品知之)

目 次

報 告

クラブ活動報告 人文科 42

理 科 43

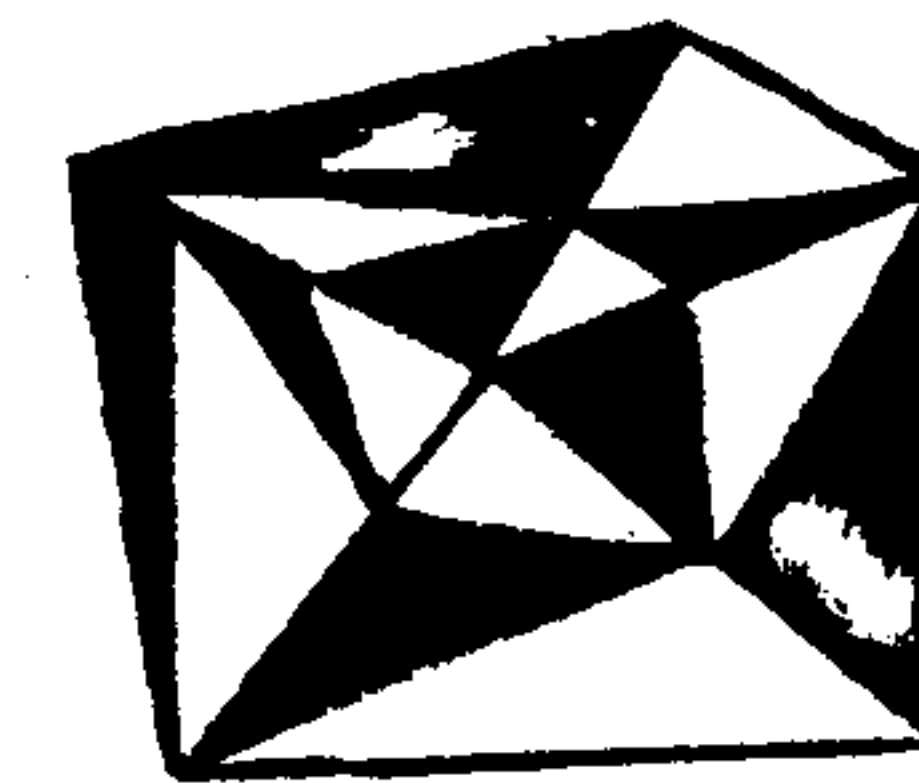
芸能科 44

体育科 44

二 部 50

同好会 51

委員会報告 55



創 作

盲 人 花井達也 60

最後の手紙 姉川雪信 61

シクラメン 詩 神田寿子 63

そ の 他

新宿徒然草 11. 41. 64

年間行事 64

編集後記 65

特集

評価

座談会		6
論文		
	打田宏	12
	秋山茂樹	13
	若林誠	14
	仲尾豊樹	19
	田名部益興	24
	藤記豊士	30

現在、新宿高校で最も重大な問題の一つに、評価問題があげられるであろう。

おとしの十一月紛争時には、六項目要求の第四番目「評価を前提とした一切の試験の廃止」という形で、一般生徒の前に姿を現わした。

以降、六項目要求に対する回答の中で答えたとおり、評価の多角化、客観化を目指した評価委員会が設けられ、最近、朝礼、朝陽時報などで、その経過が報告されている。

つい先頃、授業をボイコットした生徒に対する、評価が問題になり、評価問題の重要性を痛感したばかりである。

しかし、生徒の中には、評価方法の改善より、評価というものを否定しているものもあり、問題は、いまだに複雑である。

今回の轍では、評価問題に関するいろいろな意見を知るために、さらに、評価問題について考える際の資料になるように、以降のページに、この問題を扱ってみた。

昭和四十五年度

轍特別委員会

プロローグ

読者諸君は、もうこの轍十五号の目次を見たことと思う。

実に、大部分のページにわたって、我々委員は、「評価」の二文字を多用した。

そしてなんとなくページ増しの役を果たして来た各クラブの研究発表（轍に載せるべき種類のものでないという意味である）を削った。

「なんだ昨年にワをかけて、おもしろくないじゃないか」といって、轍をゴミ箱につっ込んだり、まるめて友達のをなぐるために用立てするのは早すぎる。

この大部分を占める評価問題を、なぜ我々委員がとり上げたかを考えてほしい。

この評価問題は、従来からあった「特集」ではなく「大部分を占める物」なのだ。

そこで、題材として、我々は評価問題を選んだ。

無論、この轍のどこをひっくり返しても、評価は、かくあるべき、という模範解答は載っていない。

いろいろな人が、いろいろな立場で、いろいろな意見を述べている。しかし、肝心な事は、読者諸君が、評価とは何か、どうあるべきか、いや、もっと小さな事でよい、評価のどんな事について考えようか考えることでもよい、要するに自分の問題として考えるということなのだ。

最後に、轍発行日に、焼却ゴミ処理場に、轍の山が築かれないことを期待する。

昭和四十五年度

轍編集委員会

座談会

『評価』問題を特集するに伴ない、座談会を開くことになった。しかし、今回は、準備期間がほとんどなかったため、参加者はごく一部の人に限られてしまい、またその内容は満足のいくものではないかもしれない。だが、この中にも、いろいろな問題が提議されてきている。これらが『評価』ということを考えるのに、少しでも参考になればと思う。

かし、結局そこにあるのは、教師と生徒という対等の関係があつてそこではじめて評価が生まれてくるというのではない。

学校において評価というものは、生徒が教師を批判するという面も含んではいるけれども、結局は、教師が生徒に対して、生徒の人格やある程度の行為に対する反省などをきめつけるもの、という要素が強くなってしまうのではないか。それが「人間的ふれあいである評価」という目的を立てているわけだが、はたして、そういったきめつけが、人間的なものに最終的にはなっていくのか？

中野 大きな問題は二つある。それは、「評価はなぜ行なわれなければならないか」ということと、「評価は人間的に行なわれなければならない」ということだ。

まず、評価がなぜ行なわれなければならないか、ということだが、評価というものを要求しているのは実は人間性の本質だろうと思う。人間はどこかで自分を評価してもらいたいという、ほとんど本能的なものをもっているのではないか。こういったものがあるかぎり、評価という行為はなくならないだろう。こういったままで、この問いかけには、私は、人間の本性が要求しているものがあるから、と答えざるをえない。

また、評価は人間的に行なわれなければならない、ということについてだが、今の質問のように、実際にそんなことを言いながら人間的ということの中にはたぶん、君たちは、人間は一人一人平等に尊重されなければならないという考え方に基づいた発言だと思いが、評価が教師から生徒に対して、一方的に行なわれていて、教師に対して生徒からは何も言えないじゃないか、それが人間的なふれ合いと言えるか、という疑問だと思う。それに対して私は、教師と

中野（国語科） 評価委員会。これは、一昨年の紛争を契機として、生徒たちの評価に対する要求や、テストに対する疑問などに答えるべく設けられた。評価の問題は、教育の根本的な問題とも当然つながってくるため、いろいろな方面において、また、個々の先生方によっても考えられていた。そこで評価委としては、これらでできるだけ明確にし、また、基本的にどういった方向をとるべきかといったことを討議し、確認していった。しかし、これらは決して決定的なものではなく、これからまだ討議されなければならない問題もある。そこで、生徒諸君たちの批判や意見も聞いていきたい。

ところで、評価には、この行為を通して、教師と生徒が人間的にふれ合いを生ずることがあると思う。そういう観点から、評価というものが、あくまで人間的でなければならないと考える。ただ、この人間的ということとは、非常にむずかしいことで、当然問題になってくると思う。また、テストについては、理解の仕方に誤解があるように思う。学校におけるテストは、本来は決して人間を差別するために行なり性質のものではない。むしろこれを通して、その人間の弱点や長所を明らかにしていき、できるだけその長所をのばし、弱点をなくしていくようにすべきだ。ただ、このためには、どのようにテストは行なわれるべきか、どのように行なうことが最も効果的であるか、といった多くの問題が出てくる。

仲尾（二E） 評価はなぜするかということで、評価を通しての教師と生徒の人間的なふれ合いということ、指摘されたのですが、そもそも評価というものが何であるかという問題が大きいので、全部を把握するのは、きわめてむずかしいと思う。今学校で行なわれている評価というものは、テスト以外にもたくさんあると思う。し

生徒という関係を信頼関係というものにまず基盤をおいていかなければならないと思う。そして、その信頼感がないかぎり、そこにはいかなる評価を行なっても、納得のできない評価ということになる。人間のやることには根本的に主観的なものが入ってくる。だから、主観的か客観的かという前に、生徒と教師の間に信頼感があるかというこの方が、重要だと思う。信頼感があれば、教師の主観的な評価であるとしても評価された側から言えば、いろいろくみとるべき点を見いだせると思う。しかしそれがなかったら、いかなる評価が行なわれようと、また、いかに客観的、合理的と言われておしつけられてこようと、納得はいかないと思う。もちろん、主観的になりすぎないように、何か客観性を得られるような方向を考えていく必要があると思う。そういう面から言うと、一人の人間が一人の人間を見るよりも、複数の目で見た方が、客観的に見られるだろう。そして、評価というものは、最後には決して一方通行で終わってしまつてはいけないうと思う。一方通行で終わってしまったのでは、人間的な評価とはいえない。

仲尾 積極的に人間性をはぐくんでいかなければならないと思うが、それは十年、二十年また、人一代で解決できる問題じゃないかもしれない。しかし、そういった関係を大切にしていきたいという形で、一方的な評価でなく、生徒に対して、先生という視点からアドバイスして、また、生徒に対してもそれが帰ってくるという、すなわち信頼関係が大事だということは、大変理想的なものだと思う。しかし、現在の学校生活を考えてみたところ、そういう関係は、ないような気がするのだが。

北地（社会科） 中野先生が言われたように、評価そのものは、

信頼関係の上に成り立っていると同時に、評価を通すことによっておたがいが納得する、これによっていっそう信頼関係を深めていくような評価をしなければならぬ。だから、信頼関係がないから評価が成り立たない、というのではないと思う。また、信頼関係は、先生と生徒がたがいに話し合うことによってできてくると思う。

仲尾 現在学校で、いったい何人の人が先生と有意義な話し合いを行なってるだろうか。こういった本当の話し合いというものが、信頼関係の上のって、行なわれたことがないのでないか。そこで問題は、いかにこういった信頼関係を作り出していかかということではないか。

北地 結局、いかに努力するかということと同時に、それは一つのわくの中にはめられたものでなく、オープンに考える、何か事あるごとにこういった話し合いができるようにもっていくこと、おたがいが努力する。そういう中に生まれてくるのではないか。

中野 話し合いといっても、私は教師と生徒のあらたまった話し合いをしているから信頼感が生まれてくるというのではなく、授業やH・R、クラブ活動などの中から生まれてくるのではないかと思う。この授業の中で信頼感があれば、当然、評価もそれを基盤に行なわれるのだし、評価を通して、信頼感を強めていくことも、ありうることだろう。だから、評価というものが、ことさら、特別なものではなく、そういった学校生活にとけこんだものでなくてはならない。その学校生活そのものに、結局、授業を通して、人間的な教師と生徒のふれあいが行なわれていけば、それがいちばん、理想的だと思う。

北地 また評価の問題にもどるが、我々の立場で評価を考えると、

と言いつける人間がいるなら、私は考えたいと思う。たとえば、同じ仕事をみんながやっていたとする。まわりはみなさぼっていて、自分だけいっしょけんめいその仕事をやっている時に、心おだやかでない人が普通であって、あいつはあいつだ、おれはおれだ、わりきって平気でいられる人がいるなら、評価というものを考えなおしてみたいと思うが、私自身、そんな気持は起きて来ない。

花井 評価というものが、絶対的なものだとしたら、ぼくはむしろしてほしくない。しかし、結局、大学などが評価というものを求めているために、自分としてはいやなのだが、絶対的な評価を受けていると、自分では思っているわけです。評価というものが、たとえば相対的なものだとしたら、ぼくはたしかに評価というものがほしいのですが、評価というものが、看板的なものになってしまったり、ぼくはむしろ、評価してほしくない。

中野 さきほど、人間的ということの中に矛盾したもの、主観的なものが多い、それがゆえに客観的なものを求めているのだと言ったが、人間というのは結局、相対的なものじゃないか。その相対的な人間存在そのものが、絶対的なものを求めるということは、ありうることなのだが、君が言ったように、評価も相対的であるべきものであるのに、大学入試の場合など、その人間の絶対的な成績として処理されている。この、相対的なものを、絶対的なものとして用いていくところに、根本的にあやまりがあるはずだ。成績だけを絶対として人間を扱ってしまおうと、結局は人間が損をすることになると思う。まちがったことをやっているのだから……。

だから教育者は人間を評価するのに、学業成績のいい人だけが、能力をもっているとは、考えていない。しかし、確率的に、そうい

やはり、諸君がどういう状態で評価されているかということが、納得されるような、きめこまかい資料なりを集めていくような態勢が必要だと思う。だから単に一回のペーパーテストだけによる評価には、問題があると思う。

花井 (二B) さきほど中野先生は、テストは効果的に行なうとおっしゃったのですが、その効果的とは、どういったことを意味するのでしょうか。

中野 効果的ということだが、主観的なものは、人間の行為の中からはぬきがたい、もっといえば、主観的なものこそが、人間的であるといってもいいぐらいだと思うが、それと同時に、我々が求めていることには、客観性ということがある。こういう、客観性を求める気持ちというものも人間性の中にある。人間性というのは、常に矛盾したものをもってしているわけだが、こういったことから言うと、テストというものも、どこかに客観性をもったものでなければならぬ。そういう意味での研究が、おこなわれているように思う。そのため、テストを効果的にやるということには、まだいろいろの研究をしていかなければならない。少なくとも、現状に対しては、私はいろいろな疑問をもつ、それは、評価あるいはテスト、そういったものをすべて含んで、我々がやっていることが、それで完璧だということにはなれない。まだまだ考えなければならぬことが、たくさんあると思う。

花井 たとえば、生徒が、自分は評価はしてほしくないと言った場合、評価というものは、やめるわけですか。

中野 果してそういう人間がいるかどうか。評価してほしくない

う中に、有能な人が多いということは言える。結局、確率論みたいなもので納得している。本当に人間が人間をわかるといことができるかという、自分で自分がわからないぐらいだから、まして他人が、絶対的な判定など、できるものではない。それ自体も人間は相対的なものしかつかめない。結局、絶対的なものを発見する方法は、ないのではないかと思う。

花井 看板的な評価はないとしても、人間は人間に対して、評価すると思う。あいつはいやなやつだ、というように。このような評価なら合点がいくのだが、へんな紙きれ一枚、それだけを見て人間を評価する、そういったことが行なわれているのは、ぼくは本意だと思ふ。

中野 だからさっきから言うように、評価というものを、人間を選別するために用いるべきではない、というのが基本的なものとしてあるのだが、にもかかわらず、それが実際には行なわれている面がある。

仲尾 ぼくたちは、高校、大学、社会へという一過程に、高校生活があるわけですが、その中で、いくらかそのような理想的なものを作り出そうと努力しても、大学に上がるためには、評価がいる。そこで、社会の要請に答えなければならぬ先生方としては、一つの矛盾のような問題も出てくるわけです。そして、自分としても結局は、評価を利用せずにはいられないような状態を作り出していくのではないだろうか。そしてその中で、いかに評価という問題に先生方が取り組まれても、きわめて大きい決定的な断絶が、先生方とぼくたちの間にあるのではないか。その断絶を克服しようと努力なさっているのは認めるのですが、これが高校教育の中だけで考えら

れているのでは、結局そこでいくら評価について考えても、学年末には評価をつけなければならぬという仕組みになっている。こういった大きな矛盾があるのではないか。

中野 しかしその矛盾は、人間の歴史の上に常にあったと思う。結局いかに人間というのは正しい評価をすることがむずかしいか、あるいは根本的にそれは不可能なのではないかということだと思う。

中野 個人的な意見だが、評価委の基本的な姿勢の中には、ある程度、社会体制における批判があると思う。常に批判的なものも含みながら、あるいは流動的な社会というものを考えながら、教育が行なわれ、評価も行なわれていかなければならない。

仲尾 体制の中でできるものは、教育ではないと思う。学年末に最終的に評価をつけることによって、つまり最終的に妥協することは、決定的な敗北ではないのか。

中野 私がまだ、敗北に終わらせない可能性があるのではないかと考えているのは、将来性のありそうな人は、たとえテストの成績が悪くても、大いに高い評価を与えておくべきだ、ということだが、我々の評価の方法や考え方によっては、不可能ではないと思うからだ。つまり、評価の中に将来に対するその人の可能性というものも加えていけるのではないか、また、加えていくべきだと考える。こういったことは、たいへん困難なことではあるが、そこに手をつけていかなければ、教育は矛盾をかかえて、現実にはいくら理想的なことを言っても、社会の体制におしまくられて、本当に人間的な評価ということは、やっていないと言われてもしかたがない。

黒田 (二A) そういう形で評価というものを、生徒として問

題にすることには、限界があると思う。あまり現実的ではないが、評価を絶対的なものとして受けとらない、つまり、自分を型にめていくような評価を批判的な目で見るといふような人間を作っていく、こういったことを教育界の中で推進していくといった運動が大事になっていくのではないか。

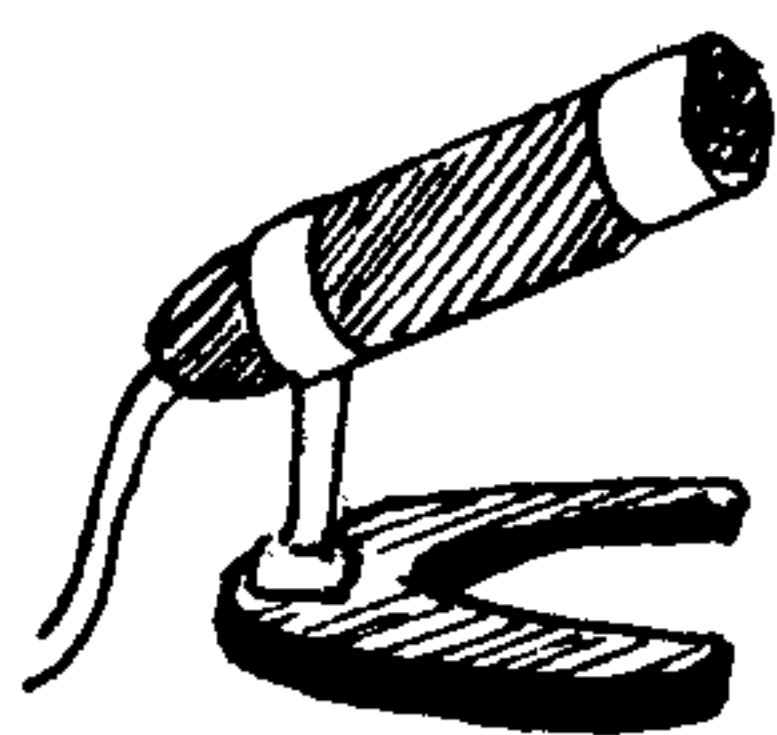
中野 それが大事な点だと思うが、これは、少数の人に対しては可能だと思いが、大部分の人は、果してこのようなことをやっているだろうか。このような、本当に自分自身に対するきびしい戦いを経て来なければ、人間というものは、本当にりっぱな人間にはなれないと思う。

仲尾 話しが初めにもどるかもしれないが、現在多くの人が自分が良い成績をとれば良い大学へ行かれると思っているが、この中で、生徒と教師の心のふれ合いといったことが、果して、本質の形で現れてくるだろうか。

中野 教師は現実の中で教育をやっていると同時に、学生に対しても教育をやっていくべきだという問題をかかえている。現実がいろいろな矛盾を含んでいるのが、そのまま教師の教育の姿勢の中にも、矛盾として現れてくるので、君たちが教師を評価する場合もある面だけをとらえて評価されると、教師自身、たいへん困っている。こういった苦しい現実の中で、ぎりぎりに見えていることは結局、いろいろな可能性や能力をもった生徒が見殺しにされないような評価をしたい。また、努力をした生徒は、それだけ現実にも高く評価されていくことも、尊重していかなければならない。

中野 新年度もこういう評価委が継続され、評価に対する、いろ

いろな角度からの研究を重ねていくことになっている。



新宿徒然草

徒然草子

あるクラスの日

予鈴の鳴りしころ、教室の中、人の五人六人、四人五人など、たがいに語らひたり。されど五分のち、主のなき机、三つ四つ、二つ三つ在りしのみ。遅れ来たるもの一人二人など、あわれなり。

二時間の授業が終わりしち、教室の中、ここちよき香りただよひたるも、をかし。

自習時間、体育館へ行きたるもの数名、図書館へ行きたるもの同じく数名、教室に残り、書を読みたるもの、遊びたるもの、語らひたるもの三十余名、行方知れざるもの二、三名……

昼休み。机寄せ、語らひたるもの、将棋したるもの、無心に食いたるもの、それを眺めたるもの、書を読みたるものなど、様おもしろし。

授業終わりとて数分、教室に残りたるもの数名にして、将棋したるものとりまきたる。四時もすぎたれば、日は暮れ、人みな帰り、いと静かになりぬ。

評価について

一年B組 打田 宏

ここで言う評価とは、毎学期末に渡される成績のことである。ぼくたちはその成績を見て自分の学力がどれだけであるかを知る。又、自分が高校で覚えなくてはいけないことがどれだけできているかを知る。そして不足している所を補う。それがたてまえであるが、今の成績には疑問の点が多い。

まず現国だが、教科書を根掘り葉掘り分析して非常に近視的なテストしかやらない。こまぎれの文学をやって評価するのである。これでいいのかと思う。

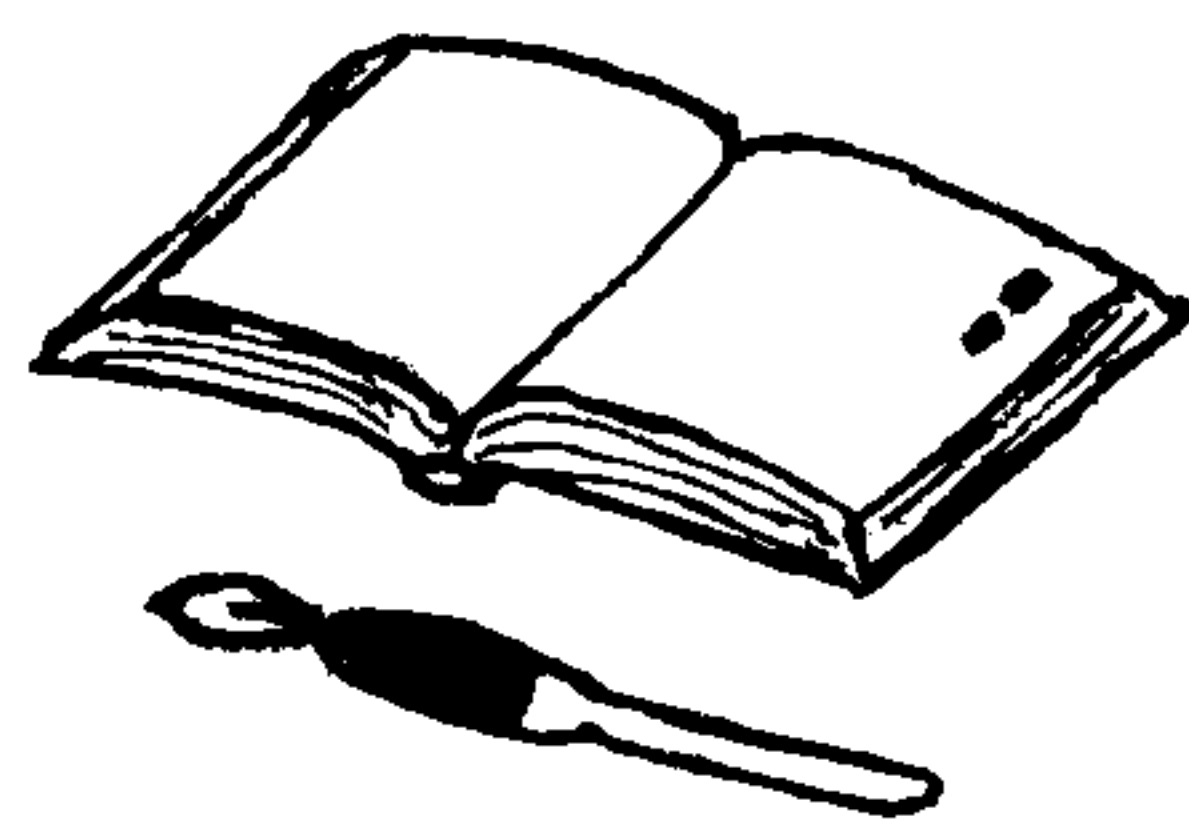
次に体育、芸術・家庭科は本質的なことを考えると点数をつけてもしかたがないように思える。

しかしこのようなことにも点数をつけなくてはいけないのは結局、大学のためである。教育制度を改めないとうしろしようもない。

☆ ☆

一学期に授業ボイコットがあり、その時政治経済の時間をボイコットした者は全員「1」になった。地理の先生も「私も一段階下げることもある。」とおっしゃった。

この評価には先生の感情がかなり入っている。このことについては多くの先生にも言えることだが、生徒の成績を握っていて、その上進路を握っている、という考えを持っている。それで生徒を統制して行く。中学ではそれが特に強く感じた。この事件でその犠牲



論文

になった友達を思い出し、いやな感じがした。

倫社の先生は「1」を途中の学期で多くつける先生だと聞いた。善意にとればその先生はボイコットした生徒に注意するためだったのだろう。しかし悪くとれば、さからわない生徒を作るロボット技師である。

生徒のことを考えてのことならその人たちがなぜそんなことをしたかを聞き、不満と不安の心を理解してやってほしい。(教師)側は結局折れたが、校長先生が「ボイコットはよくない。」などとおっしゃった。その言葉には評価のことだけしか出てこなかったのは残念だ。先生は先生になった時の気持ちを忘れずに教育してほしい。

評価を考える

二年C組 秋山 茂樹

私は、しばしば、朝陽時報に載せる記事を書くため、H・R運営委員長の職権を乱用する。すなわちH・Rの話し合いの時間を利用して、クラスメートに、記事の参考にするため意見を聞くのだ。

つい最近も、朝陽で評価問題特集をしたため、クラスの数人に評価についての意見を求めた。だいたい古い話になってしまったが、お

ととしの十一月の紛争の時、多々意見が出た中で、多くの生徒が、一様に評価の客観性、全面性を主張したようにおぼえていた。しかし、クラスメートの意見は、当時をしるばせないものだった。指名された者のうち半数は、「評価に教師の主観が入るのはしかたない、今のままの評価でよい」と答えた。残りの大多数は、「評価なんてかってにつければよい。自分は評価など無視する」と答えた。そして、その残りは、「わからない」と答えた。私にとって、予想外な言葉の連続だった。

紛争を経て、諸制度が変わったけれど、生徒の気持は、それ以前のそれに戻っていくような気がしてならない。これは、評価問題についてだけ言えることではない。私は、こんな推論を立ててみた。

だが、評価問題を一般生徒に考えさせるために、割腹自殺したとする。あるいは、バリストでも結構だ。一、二週間は、その話と、評価問題でもちきりになるかもしれない。しかし、そのあとは、どうなるのだろう。やっぱり、もとの、「評価なんて知らないよ」の一般生徒にもどってしまうのではなからうか。

私は、朝陽時報にあてられた寄稿、多くはゲキ文調の評価反対の文章、に目を通す。しかし、寄稿は、すべて評価反対の文章であって、このままの評価でよいという寄稿は、まるでない。だが、私は、前者は寄稿の数は多いけれど、言っている人の数は少ないことを、後者は、その逆だということを知っている。

私は、これらの寄稿を読むと、いつも、「これは一般うけしないな」と思う。

その寄稿は、「人間が人間を評価するとは何事ぞ。まして、その評価が、教師の主観によって、しかも、大学入試の際には、内申書

として、見られることは、もう一度、何事ぞ！というようなものである。

しかし、一般生徒は、「何を言うか。てめえの内申が低いからって、ジタバタするな。第一、現実に、入試の際、内申書が必要な大学があるんだから、評価をなくすわけにはいきまい。もっとも、俺達高校生が、ギャーギャー叫べば、入試に内申がいらなくなるんなら、考え直してもいいけど、そうもいくまい。それよりは、せつせと入試の勉強して、せいせい内申を上げた方が徳だよ」と考えるだろう。さらに、一般生徒系大物派は、「評価なんか、自分にとって関係ないよ。教師達も長い間、点をつけて飯を食っているんだ、評価も、自分の学力を知ろうで役に立つかもしれない。それにしても、奴らは小さいね。たかが評価の事ぐらいで。ピーチク、パーチクさわぎおって。大物になれんよ、大物に……」とのたまうであろう。

評価を、客観的、全面的に行なうよう改めることは、一般生徒にとって必要なのだろうか。私は、どっちでもよいと答える。改めれば、評価反対、評価改良を訴えている生徒と妥協が増えるだろう。ただし、教師にとっては、なかなかやっかいな事だが。しかし、一般生徒には関係ないことである。

だけれが、人づてに、「評価の方法が変わったんだ」と伝える。「なんでも、ペーパーテストだけじゃきまらないそうだ」「そうか、それなら、なにか対策を立てよう。でも、ペーパーテストだけの方が楽だったなあ」この程度の変化しかないだろう。

だいたい、評価委員の先生がたが、評価を改良しているのに、どれも注意を払わないのは、なぜだろう。それは、それが改良であっ

ても自分ばかり関係がないからに他ならない。そして、改良案が実施されると、改良の「良」の字を見て、少しは気持がよくなったような気がするのだ。

はっきり言って、一般生徒には、評価問題は、どうでもいいのだ。だけれが、腹を切るか、だけれが、バリストをするか、または、だれか悪役の教師が露骨に、ひどい評価をつけ一般生徒を怒らせる、そうでもしなけりゃ、一般生徒は、評価問題なんて考えない、関係ないんだ。

轍で、いくら取り上げても無駄なんだ。しかし、一般生徒は気づくべきだ。あまりに、だけれがとしたらしょうという、一般生徒の受身の姿を。そして、一般生徒があまりに、安易に、何も考えずに、高校生活を送っているかを。

最後に、その一般生徒を構成しているのは、読者一人一人であることを。

公害問題研究会即ちよい子の

集いに関するやや雑感的かつ

極めて支離滅裂な文章

二年D組 若林 誠

初めに、「公害問題研究会」の生いたちから記そうと思う。

余談にはなるが、「公害問題研究会」は、別名を「よい子の集い」と

言い、会員の間では、むしろこちらの呼称のほうが正式な名称となっている。「よい子の集い」と言うと、何かこうそらざらしいと言うか、偽善的というか、そんな感じの語感を伴い、失笑せざるを得ない諸君も多いことと思う。実は私達もそれを承知の上で、あえてそのような呼称を選んだのだが、その理由についてはここでは触れない。ただ「公害問題研究会」と書くのは、いかにもしち面倒くさいので、以下は「よい子の集い」という名称を使用させてもらうことを御諒承願いたい。

昨年九月の学園祭の折、2年D組はクラステーマに公害を取り上げ、「公害を斬る」と称して、数多い公害の中から特に「水俣病」「ヘドロ公害」「光化学スモッグ」の3つを選んで展示、発表し、

「現代社会の矛盾を厳しく追求」（某新聞社評「失笑にたえず」）したことは皆の記憶にも比較的新しいことと思いますが、さて学園祭終了後、同クラスの者で、もっと公害のこの見たい知りたい聞きたい話したいという連中が四人ばかり集まって昨年11月に結成されたのがこの「よい子の集い」です。以後、暇を見つけては公害問題その他に関する本の読書会を開き、地道と言えばあまりに地道な活動が続けてまいりましたが、年が開けて我々の会も軌道に乗ってくると、公害の実態を少しでも多くの人に知ってもらおうということになり、去る2月8日に新潟水俣病を扱った映画「公害とたたかう」を上映したわけです。

ちなみに「よい子の集い」で現在までに使用した本を列記してみると

「苦界浄土」（熊本水俣病）

「生ける人形の告発」（熊本水俣病）
「小さな胸は燃えている」（産炭地児童の作文集、公害とは直接的には関係ない。）

「公害と労働運動」（新潟水俣病）

「公害と住民運動」（公害一般）

といったところであるが、この中で特筆すべきはなんと言っても「苦界浄土」であろう。患者とそれを取り巻く漁民の生活を主軸とし、事件の経過、公害の発生源たる会社側の態度、を一片の怒りも交えず、淡々として書いているのがかえって不気味である。特に患者を語る部分は、まさに彼等と添寝せんばかりで、この本は副題を「我が水俣病」と言うのだが、著者石牟礼道子は、まさに水俣病を自分自身の問題として捕えていることが充分察せられるのである。また、行間には透明な詩が輝いていて読む者の心を打ってやまない。このように公害と文学という、おおよそかけ離れたテーマを見事に両立させた作品は過去にはなかったし、これから先もおそらくないであろう。私にとっても愛着のある作品で、皆さんにも一読を勧めたい。

さて、次は映画会前後のことを簡単に述べたいと思う。そのような企画は昨年からあったのだが、本腰を入れ始めたのは一月も半ばで、最初は一月二九日上映の予定だったのだが、さまざまな事情により由折の末、二月八日上映の運びとなった。映画の題名は「公害とたたかう」といい、日本四大公害（熊本水俣病、イタイイタイ病、四日市、新潟水俣病）の一つである新潟水俣病（阿賀野川水銀中毒と言った方が通りがよいかも知れぬ）を扱ったもので、某独立プロから、五千円で借りてきた50分程度の作品である。

昭和三十五年頃、阿賀野川流域にある昭和電工鹿瀬工場社宅に原因不明の奇病が発生、ネコ、ニワトリがバタバタ死んでいた。これが悲劇のはじまりである。熊本水俣病の際の貴重な前例があり、発見が早かったとは言うものの、今日まで死者五名、患者二一名、二〇〇PPM（日本人の平常値三〜一〇PPM）以上の無症水銀保有者で入院治療を受けた者九名、胎児性水俣病児を生む危険ありとして妊娠規制をうけた者三八名、一〇PPM以上の保有者一〇〇余名を数えている。しかも上記の数字はいずれも新潟県が確認したものだけであり、実際はこれをはるかに上回ると思われる。

川が怪しい。川を汚したのは誰か。加害者は昭和電工鹿瀬工場アセムアルデヒド生産工程の中で副生されるメチル水銀が、そのまま川に捨てられていたのである。これが川中の魚貝類に蓄積され、人間がそれを食べることによって水銀はその体内に蓄積し、有機水銀中毒水俣病が発生する。これにやられると中枢神経が侵されるため、手足のしびれ、視覚障害（有機水銀中毒症の特長の一つ、視野が極端に狭くなる。例えば三人の男が立っているとすると、真中の男しか見えない。）言語障害等を伴い、ひどいときは死亡、よくても（？）廃人同様となる。おまけに脳細胞は再生しないため、一度これにかかると二度と回復しない。治療法としては、ベニツラミン、チオラなどの投与で水銀を体外に排出する方法がとられているが、〃焼け石に水〃を地でいくようなもので、はっきり言って治療法は皆無である。

以上のようなところで水俣病の恐しさがおわかり頂けたと思う。しかし加害者である昭電側は、かつての熊本水俣病同様その責任を認めようとせず、そればかりかあらゆる手段を講じて証拠の隠滅を

に水俣病が発生していたこと、地震の際に農薬倉庫は確かに崩壊したが、農薬は全く流出しなかったこと等から考えると、その説はきわめて信憑性に乏しいと言わなければならない。

企業のこのような態度に対し、住民は〃新潟県民団体水俣病対策会議（略称「民水対」、S40年8月結成）を設置し、その責任を追求して立ちあがることを宣言した。（なお、この民水対は、S45年1月16日、県評と共に〃新潟水俣病共闘会議〃に発展した。）また、被害者も民水対の援助と支援を受けながら、〃阿賀野川有機水銀被災者の会〃（略称「被災者の会」）を結成して、その闘いは少しずつ、しかし着実に前進している。

——ざっと映画の内容の説明を兼ねて、現地の実状を述べたわけです。もっとくわしく知りたい方は私のところまでどうぞ。パンフレットを差し上げます。

結局、映画会の日には、当方の予想をはるかに上回る60〜70人の人が集まった。ここで改めてお礼を言わせて頂きます。映画を鑑賞した後で、カンパをお願いしたところ、たちどころに2588円が集まりました。ここで改めてお礼を言わせて頂きます。（これらの金は朝日新聞社を通じて被災者のもとへ送られました。）その後、室を出かかっている人達を呼び止めて、アンケートを書いてもらいました。ずいぶん手数だったことでしょう。ここで改めてお礼を言わせて頂きます。さてそのアンケートの結果が、はなはだ興味深いので、ちょっと触れておきたいと思います。

アンケート

1. 新潟水俣病を御存知でしたか

企図している。それが被告昭電側の鑑定申請であり、横国大教授北川徹三の雇用であり、彼等の提唱する農薬説なのである。それらの簡単な説明を以下に述べる。

a. 鑑定申請……この鑑定申請は裁判にむやみやたらと科学的事項を持ち込んでおり、

1. 裁判の争点を無限にひろげ、混乱に陥れることによって原因をあいまいにする。

2. 難解な科学論争に引き込むことによって、世論や大衆運動の盛り上りを妨げる。

3. 裁判の遅延を図る。

ざっと以上のようなことを企図したもので、この鑑定事項は、難解な学説そのものの可否を鑑定したり、大自然の複雑な諸条件のもとで発生した水俣病を鑑定したり、事件発生当時のすべての条件を再現しなければできないような鑑定を求めたりしている。

b. 横国大教授北川徹三の雇用……横浜国大工学部教授北川徹三は、被告昭電側証人団のチャンピオンとも言うべき存在で、

事件発生当時から昭電のバックアップの先頭に立つ人物である。しかも彼は独断で、事実を見ることをせずに昭電を擁護している。

c. 農薬説……昭電の提唱する反論。別名を「地震農薬説」と言い、要するに新潟地震の際に農薬倉庫から阿賀野川に流出した農薬が原因であると言うわけだが、新潟地震以前にすで

a	はい	44
b	いいえ	2

2. 新潟水俣病の原因である工場の名前を御存知でしたか

a	はい	19
b	いいえ	27

3. 新潟水俣病をはじめとする多数の公害に関心がありますか

a	かなりある	14
b	まあ、ある方だ	28
c	さほどない	4
d	全然ない	0

4. 前の設問でa或いはbに○をつけた方にお伺いします。あなたは同じ趣味を持った者同志が集まってサークルを作り、公害問題その他を話し合ったりしたいと思いませんか。

a	機会があったらぜひやりたい	16
b	公害問題自体に関心はあるが、いろいろな理由で今はやりたくない	22
c	やろうとは思わない	2

（この設問ではaに○をつけるものは殆んどいないだろうと思っていたが、何と16人も〃うれしい誤算であった。〃

5. 去年の学園祭で2年D組はクラスターマとして「公害を斬る」を取り上げ、その後同クラスの連中が集まって、もっと

公害の本質をとらえようという意図で「公害問題研究会」＝「よい子の集い」を昨年11月に結成し、活動として1・2週間に一度公害に関する読書会を開いて討論を重ねてきました。そしてもっと多くの人々に事実を知って頂くという意味での本日の映画となったわけですが、我々のこのようなサークルに対する意見、或いは本日の映画会の感想をお聞かせ下さい。

比較的多かった意見を列記してみる◎は特に多かった意見◎

◎貴会の活動を活発に(もっとアピールをさらに映画会を)

◎公害の現状を知ることができた。

◎水俣病以外の公害についても研究するとよい。

◎こういう活動には限界が……

◎公害以外の例えば再軍備、教育を問題とするサークル成立を望む。

◎公害は他人事ではないという実感(切実に自分の問題として受け取る。)

◎中立の立場で写して欲しかった。(この映画はかなり左がかった。)

◎同好会にしたら良い。

◎今後も続けて欲しい(話し合える場の提供)

◎貴会の見解を発表して欲しい

変ったところでは次のようながあった。

◎感動的でした。ホント、これからもガンバッテ下さいね！

(2年女子)……なんか嘲笑されてるような感じ

◎えらいと思う、感心する、尊敬する、まじめだと思う、自

分を反省する。(1年男子)……なんかバカにされてるような感じ。

※ここでのアンケートは、まとめやすいように、本来のものに若干の修正を加えてあります。

アンケートはざっとこんなところです。いかがでしたか。何かのお役に立てれば幸いです。

話がバードと飛んで恐縮だが、君達はなぜこのような活動をしているのかと言う質問に対する解答は、正直に言ってまだない。しいて言えば「自分達にできることを、自分達にできるペースでやっていくんだ」ぐらいしか言いようがない。しかしこれでは何の解答にもなっていないことは私自身が一番よく承知している。しかし現段階では他に言葉が見つからない。お許し願いたい。

——ここまで書くと、さすがにもう書くことがなくなった。余談にはなるが驚いたことに昔の私はずい分文章を書くのが上手であった。とは言うもののそれも小学生までの話で、「○○山に登って」と言うような題ならかなりの名文が書けたのだが、中学生になって「日本人と公德心」と言ったような題になると、もうカラキシだめなのであった。この傾向は年と共に著しくなり、最近では作文と聞いただけで、精神的にと言うより、生理的に嫌悪感をもよおすぐらいになった。かような私がこれだけの文章を書かされるのは盲腸を切られるのよりつらい。

それはさておき、先だってその映画会の成功(一応成功と言ってもいいでしょう。)は、何と言っても見に来てくれた人達の協力が

あったからに他なりません。最後になってしまいました。再びお

礼を言わせて頂きます。特に映写機を動かして下さった小俣先生、

私達の企画に非常に好意的で、いろいろと尽力してくれた生徒会長の花井君、個人で500円という驚異的な金額をカンバしてくれた和田さん等には表彰状を送りたいぐらいの気持です。どうもありがとう。

朝鮮人

—ぼくたちのもつ差別—

二年E組 仲尾 豊 樹

○月○日

ぼくの朝はいつも時間との競争で始まります。七時二〇分起床、洗顔、朝食をかきこんだあと、七時四〇分にとびだします。そして駅につくのが七時四五分、車内の悪い空気を胸いっぱい吸いこみながら新宿駅に着くのが八時十三分です。めまぐるしい時との競争、……。その中で、ぼくはたくさんの人達に出会います。

若いサラリーマン、退職まじかい人、婦人、混雑にあえぐ小学生……。そして、時々朝鮮高校生の男子や女子に会うことがあります。遅刻しそうになって駅構内をばたばたと走りまわっているぼく。その姿はあまりにも下品でぶかっとうです。もし、正常な人間が見たら、大声をだして笑うことでしょう。そんなぼくですけれども、彼ら朝鮮高校生をみつけたとき、あせる気持ちの奥で一瞬「朝鮮人だ」と思います。そして、ぼくは走っていってしまいます。なにしろあ

と七分で遅刻なのですから。

ところで今日、ぼくは何げなしに二人の友達に、「朝鮮人についてどう思う。」と聞いてみたのです。A君はすばり答えました。

『べつに何も感じないよ。』B君は、さももともであるという風をしてこり答えました。『俺はね、毎日赤羽から山の手線で池袋まで来ているんだけどさ、途中電車中だつてうじゃうじゃ朝高の生徒見かけるんだ。十条の駅なんていっぱいさ。朝高生ってナイフ持ってるんだぜ、恐ろしいったらありゃしない』これを聞いてぼくは考えこんでしまいました。ぼくも時々、新宿駅やなんかで朝鮮高校生をみかけるのです。A君の意見には、ぼくとしても逆らう余地はありません。ぼくは生まれてこの方十六年間、そりゃ母には時々、「朝鮮人はいやらしい」とか、「汚ない」とかいわれてきたけれど、ぼく自身そんなものかな、と思っていにくらいで別になんとも思っていないませんでした。ましてや朝鮮人がまだ日本に六十万人以上いるということを知ったのも、つい一年ほど前のことでしたし、彼らと会っても「あっ、朝鮮人だ。」というくらい意識しなくてもいいませんでした。ここでいう「朝鮮人」ということは、**「アメリカ人」「フランス人」という使い方とはほぼ同じであるとぼくは思っています。**だから、ぼくとしてもA君とまったく同じなのです。現実には差別していいのですから、差別者であるわけがありません。今は国際協調の時代です。そのような時代に「差別」なんて考えるのは時代遅れじゃないでしょうか。だいたい話が違ってしまいましたが以上がぼくの意見です。

そうそう話を元に戻しましょう。B君に対して、ぼくは考えこんでしまったのです。ぼくは、B君は絶対にへんだと思いました。ど

りして朝鮮高校生にこれほど恐れを抱かなければならないのか。ぼくたちの学校だってナイフを持ってみせびらかしている人はいまいます。いきがっている人もいます。B君はそれを承知の上で「朝鮮高校生は恐しいったらありゃしない。」なんていつているのです。「まさか、みんなナイフもってるわけじゃないんだろ。」ぼくはB君があまり一方的なのに少し怒っていました。「そりゃ、みんな持っているわけじゃないけどさ……」B君はなぜかあとが続きません。いいわけを考えている様子でした。「じゃあさ、一回山の手線に乗って十条でおいて待っててみなよ。五人や十人じゃないんだぜ。一回もそんなめにあったことがないから、怖いなんて気おこさないのさ。」ぼくはますますあきれてしまいました。どうやらB君は自分が年中見る光景だけをおしていつているらしいのです。「赤羽から池袋行きの山の手線にはたくさん朝鮮高校生がのっている。その中のある人はナイフを持っていた。」ぼくが頭の中で整理してみるとたったこれだけの事にしかありません。でもB君はぼくが、これだけのことと思っても、「だから朝鮮生は怖いのだ」ときっぱりいいきって絶対に譲ろうとしないのです。

ぼくは、このような態度を崩そうとしないB君に思いきって、「ナイフを持っているって一部の人だし、朝鮮高校生は悪いと決めつけるのは絶対によくないよ。ナイフを持つ人だって、そのようになった家庭の影響やら社会のおかしなところがあるのかもしれないじゃないか。それを悪い悪いと決めつけるのは、結局朝鮮人を差別してるんだよ。」といつてやりました。B君はブスッとしていました。ぼく自身もこの時ハッとしました。それというのは、ぼくがあまりにも在日朝鮮人を知らないのではないか、という疑問が

でもどうもおかしいんです。今の世の中は本当に、尊い人の命を失った上で建設された、よい世の中、平和な世の中なのでしょいか？ぼくは、B君にあんなこといつてしまったてまえ、前よりも新聞に目を通すようになり、少し本を読んでみたのですがそこではたととまどってしまったのです。

ぼくは、いつも新宿で見ている朝鮮高校生が予想以上に辛い状況にしていることを知ったのです。たとえば、去年よくおきた朝鮮高校生への暴行事件です。警察はケンカ両成敗だといいつながら、逃げた右翼学生をそのままにして、襲われて負傷した朝鮮高校生をひっぱっていつたり、ブタ箱へぶちこんだりしているのです。また、朝鮮高校生が襲うらしいというデマを付近の高等学校へ連絡したり……それはもうあげればきりがありません。またその他のことだって同じです。日本には、特に関西地方には特殊部落と呼ばれる部落があることをいつた時も、ぼくはむしろ腹が立ちました。だってそうでしょう。同じ人間であるのに「あいつは、あそこの部落だから結婚しちゃあかん」とか、よい就職口からは追いだされとか、高校への進学率が62・2%とか聞いたらだれだって腹がたつじやありませんか。出稼ぎ労働者の問題だってそうです。ぼくは『東京に山谷というところがある』とは聞いていましたが、そこにどういふ人たちがあつまっているか。どのようなひどい生活環境なのか、などということは全然知りませんでした。数年前に『山谷で暴動があった交番が焼きうちされた』という話を聞いて、どうしてあんなことするのと母に聞いたとき、「労働者や浮労働者がいるからなんでもしちゃうの」と汚ないものでも見たような顔をして言ったとき、ぼくもそれにつられて、「怖いなあ」と思ったことがありました。

自分でこんなことをいつて切に感じたからでした。ぼくは朝鮮人（その中に在日朝鮮人も含まれるわけですが）について、もっとたくさんのことを知らなければならぬと思っています。それでなければ、ぼくもB君のようなことになるかもしれないと。ぼくは少し朝鮮のことや差別についての本を読んでみたいと思っています。

×月×日

このごろよく感じるんです。「ひょっとして、ぼくは差別者ではないだろうか」……って。ぼくは今高校生です。「戦争が終って、ぼくらは生まれた」なんて歌が巷にははやっていますが、実際戦争を体験したことはないのです。

昔、青春残酷物語というまんががありました。永島慎二のだったかと思えます。その中にハイチャンパーティー（幻覚剤を飲んで語りあかすことなのですが）の場面があって、ある会社の社長と、フーテンとの対話があるのです。

「われわれの世代の人間はこの手をまだ人間の血で染めてはいないー」「そのわれわれの前で、あんたは何を笑うのだー」「たしかに、わたしたちは多くの人々を……尊いいのちを失った……だからこそきみたちはいまそうしてあぐらをかいていられるのではないかね？われわれの時代の多くの仲またちの死体の上で、すきほうだいしていることを忘れてやしないかね……？」

ぼくはこのごろ、この社長さんのいうことが、本当に正しいのかどうか判らなくなっていました。ぼくは、ぼくの生活は別に（つい先頃までは）不自由であるなんて思ってもいませんでした。確かに、この社長さんがいのようにすきほうだいしているのです。

ぼくが小さい頃、母に「労働者と労働者はどういふふうに違ふの」とたずねたとき、母は、「労働者はママみたいな人だけ（母は勤めていたのです）、労働者っていうのはお勤めがなくて、いつもふらふらしている人のことを言うの。」と教えられたことがありましたがぼくは今でもそれを覚えています。その頃は、「うちは労働者でなくてよかった」なんて一人でぼっとして、それ以来ぼくの心の中には、『労働者は生きがい求めて働くカッ・コイ・イ人。労働者は濁酒（どぶろく）をくらって穴掘り続けるこわい人』というイメージができてしまっていたのです。でもぼくはそれがまったくまちがっていたことを知りました。地方から出稼ぎに来た人は職を求めます。でもよい職はありません。彼らは山谷にいつて働きにでます。自分の家の暮しのために働くのです。他の人だってそうです。働き口のなくなってしまう人、働こうにも就職させてくれない人。みんな働くために、生きるために山谷に来るのです。だから、警察の悪さに彼らは怒ります。俺たちは人間なんだ！彼らの怒りはホワイトカラー族や、ブルジョア共に比較にならないほどに純粋です。人間として、彼らは抵抗をするのです。それをどう感じがいしたのか、ぼくはおかしな考えを持ち続けてきたのでした。

こう考えてくると、ぼくはおかしなことに気がつきました。数ヶ月前、ぼくが「朝鮮人についてどう思う。」とA君とB君に聞いたとき、A君は「別に何も感じないよ。」といい、ぼくもそれを当然のことと思っていました。でもはたして、それでよいのでしょうか。先程述べた警察のデマ宣伝のことを考えてみましょう。警察はその日（一九七〇年六月六日）、まったく根拠のないデマを付近の高等学校へ流したのでした。以下の文は、その後事件の内容を伝えた

ビラからの抜粋です。

六月五日、午後二時十五分ごろ、警視庁当局は東京朝鮮中高級学校に対し電話で「電車内で聞いた話だが、六月六日に朝高生が総武線各駅においてケンカをするというではないか」といつてきました。これに対し朝鮮中高級学校側は全く根拠のないデマであることを述べ、同時に警視庁の悪らつな下心を看破し厳重に抗議をおこないました。しかるに、当日、警視庁当局は意識的に総武線沿線の両国高校、墨田高校、本所高校、向島西高、向島商高、深川高校などその他多くの高校に対し、「六月六日に朝鮮高校生たちが総武線各駅で日本の学生を襲撃する」というから各高校は注意せよ」と通報しました。警視庁が流布したこのようなデマ「情報」のため、或る高校では緊急職員会議が開かれ、或る高校では授業を短縮し、或る高校では父兄が「休校してほしい」と申し出る等、不安定な空気と騒然たる雰囲気がかもしだされました。

警察のひどさはいうまでもありません。でも、もう一人、この事件での中心人物がいます。それは、各高校の教師です。彼らはその報せが耳に入ったとたん、すっかり真にうけて情報の真想を確かめもせずに臨時職員会を開き、ひどいところでは午前中で授業を打ち切ってしまったのでした。「朝鮮人が襲撃する」それを聞いた時に、彼らはそれは疑う余地のないものだ、としてしまったのです。これが本当の教育者のなすべき事なのでしょいか。ぼくは、この先生達の心の内には、「朝鮮人→恐しい人」という定式があるのではないかと疑わざるをえません。いくら警察のいうことだから、といったってそれが絶対に正しいなどと誰が言いきれるのでしょうか。

ぼくはこう思うのです。その先生たちの心の中には朝鮮人に対す

ぼくの心の中の朝鮮人は、この時母のことばから受けた影響が非常に強く残っていたのでした。

このようにして、ぼくの心の中には差別感情が焼きつけられていました。ぼくの場合、それは親によるところが非常に大きかったように思います。このようにして、差別感情は、戦前の人たちから戦後の人たちへ受け継がれてきているのです。「差別してはいないんだ。ぼくは差別者ではないんだ」という決めつけ。だけど、その裏で、我々はやはり差別をしているのではないのでしょうか。

△月△日

『差別をなくす、ということは大変なことだ。』ということが判ってきました。戦争を経験した人たちは皆言います。「朝鮮人は悪い」「いやらしい朝鮮人でも、案外親切なところがあるんだな。」その大人たちのことばを聞いて育ったぼくたちも、やっぱり『朝鮮人』ということばを聞くと、アメリカ人、フランス人と同じような意味では語れない何かがあるのです。以前、ぼくは『朝鮮人』という使い方は、アメリカ人、フランス人という使い方とほとんど同じであると思っていました。だけど、今考えてみるにこのほとんど同じであるが少し別の感情が入っている。この感じが、ものすごく大きな問題を持っているんじゃないかと思うのです。

なぜ朝鮮人ということばだけ、おかしい意味が含まれるのだろう。そう考えた時まず思い浮ぶのは、家庭や学校での教育に欠陥があるのではないか、ということです。母は戦前の教育を受けました。父も同じです。だからぼくに話してくれるのは、空襲の暗い思い出と、朝鮮人への侮辱の思い出ばかり……。ぼくの父母は戦前の学校教

る差別意識が残っているのではないか、そして、それはその先生たちの中だけにあるのではない、日本人には共通の差別意識が心の中にあるのではないかと。今、ぼくの場合を考える時、それは非常に明らかになってくるのです。ぼくは、自分が山谷に対して差別意識を持っていたのだということを先程告白したのですが、あれだつてつい先頃までは「自分には差別意識など全然ない」と思いこんでいた中で抱いていた感情なのです。ぼくは小さい頃、母に「労働者と労働者は違うのよ」といわれ自分なりに、そう思いこんできました。その時の母の「汚いものを見るような顔」から判断して、ぼくは「労働者ってのは悪い人なんだな。山谷ってのは汚い所なんだな。」と思い続けてきたのです。

朝鮮人の見方も同じです。ぼくが小学一二年の頃、母方の家のお祭りでぼくは母に連れられて、それを見に行ったことがありました。その道の帰り、一件の白いベンキで塗られた小ギレイな家の前を手をつないで通った時、母はぼくにこう言ったのです。「ママの小さかった頃はね、この家に朝鮮人がいたのよ。ママたちは、このおうちが怖くて怖くていつもかけて通っていったわ。」戦前のことです。おそらくこの家にいた朝鮮人は、日本の情勢の悪化に伴って周囲の人々からの冷遇が一層強まってくるのを、さも恐しく心細く感じたことでしょう。子供たちからは石を投げつけられ、家の前は走って通られ、鮮人鮮人と馬鹿にされ……。だが母はそのようなものには一切触れずに、ぼくに対してこのように言ったのでした。その瞬間、ぼくの心の内には、まだ見ぬ朝鮮人のイメージが焼きつきました。白い家にいて、目を細くしてにこにこ笑う口もとに、犬歯が二本顔を出している。白い家に住む恐しい人。その後十数年、

育を受けたのです。そこでは教育勅語を暗唱させられ、排外主義をたたきこまれたのです。ですから、父や母が朝鮮人敵視になるのも当然でしょう。そして、そのまちがった考え方は、子守り唄の合い間や、赤ん坊の周囲の疑問への解答としてたたきこまれてしまったのではないのでしょうか。そう考えたとき、ぼくはそのような考えを是正するための小中学校教育が非常に大切なのだということを、切に感じたのです。ところが、ぼくは今の小学校や中学校の教科書を見たとき、非常な危険を感じざるをえませんでした。例えば、多くの人は知っていると思いますが、関東大震災の時に、反乱を企てる疑いありという名目の下に、六千余名の在日朝鮮人、中国人が関東の人々によって虐殺された話は、歴史の教科書では、まったく取りあげられていません。部落民の話だってそうです。その上にひどいことは、美国堂発行、役に立つ社会科資料集という小六用の歴史資料集には「朝鮮民主主義人民共和国」のことを「北韓人民共和国」、また、日本がアジア侵略への布石として行なった日韓併合を「日露戦争後急に日本を頼り、一つの国となった。」なんて、正反対のことをいっているのです。なんと腹が立つではありませんか。

こう考えるうちに、ぼくは差別には個人だけでは解決できない奥深い問題があるのではないかと思うようになりました。つまりこうです。ぼくたちが今持っている差別はテレビや新聞を通じて、また人に聞いたり先のような教育を受けたりして入ってきたものです。テレビや新聞は事実を伝えるように思いますが必ずしもそうではありません。テレビ局だって会社ですから、いくら局員が頑張ってみても、一定の限度を越えたと上からの圧力でつぶされてしまいます。ましてや教育にあっては、後ろには文部省がいて政府がいます。教

科書裁判で国と教育との関係をはっきりさせようといきがつている政府のことです。先のような教科書には書かれていない事集は教えるな、というような通達をだしているのとは当然であると思います。そして政府は教育だけを通じてではなく、その他新聞、TV、はては自民党の後援会などを通じて、うまく国民をだましながら、影では公害企業を助け、朝鮮人の自由を奪うのです。さあ、そうするとよいいこんがらがってきます。教育で本当のことを教えようとはしない政府、ぼくらの無関心を増々育てている政府、ひょっとすると、政府はぼくたちに本当にためになることは何一つしていません。ではないだろうか。政府の正体は何なのだろう。ぼくは朝鮮の問題や、それに伴う差別の問題を考えたとき、さいごにはここにぶつかってしまいました。むずかしい問題です。政府って、いったい何なのでしょう。容易に解決できそうにはないにしても、現に政府は差別を助長させつつあるのですから、そのような納得できない政策に対して徹底して反対して行こうと思っています。それと同時に無関心にはまりこみ、政府の策謀によって差別を助長させつつある日本人に対して、「あなたたちは差別者である」と訴えていこうと思っています。日本政府にも、情性に押し流されるぼく自身にもぼくは怒りを感じます。ぼくは自分の情性に散在する差別意識を取り除いていくことこそ大切なのだということがようやく判りかけてきました。近頃のぼくはこんなことを考えています。「朝鮮高校のことを皆は朝高といい、朝鮮高校生のことを朝高生という。呼び易いのかもしれない。けどおかしいじゃないか。昔、日本人は朝鮮人のことを鮮人と呼んで馬鹿にした。そして今、我々は朝鮮高校のことをあえて朝高(チヨンコウ)と発音するのだ。チヨンコウ、チヨン

不団結の問題、そして評価の問題など、あげればまだ出てくるだろう。

さて、毎日毎日の学校生活、そして家に帰ってからの生活の中で、なんとといっても「勉強」に使われる時間が一番多い。そして、その全体的集約的結果、成果として、同時に自分自身の学習に対する「評価」が通知表に示されるわけだ。自己の学力の到達度がこれによって一応わかることになる。だが、これは筋道としてそうであるというにすぎない。実際的には他人と比較する一手段として、つまり、優越感(劣等感)を得、チラッとみて、アアコンナモノカ、で片づけられるものとしてある。自分の本当の勉強なり実力なりからはたいして(ほとんど)関係ないものに感じられる(にもかかわらず、よい評点を得ようとするのはなぜだろう?) または、全く自分とは関係ない、ただる学期に1されつかなければいいという感覚1したがってストレスまではたっぷりと遊ぶということもなる。いずれにしても現在の評価は、そういう意味で軽視される傾向にある。しかし、他方受験における「調査書重視」の傾向に驚いて、「入試の弊害が日常の授業にもちこまれた」「負担が多くなった」といいたがらも、評価はやっぱりよい点をとらなくては、という逆の傾向もあるというてよいと思う。この二面性は、評価が生徒の内面的発達から遊離していることを大前提として、外的な効果、つまり「勉強」そのものではなく、そのあとの結果、影響をどうみるか、ハッキリいえば進学および条件のよい就職を望む人は少しでも有利になるために評価をあげる努力をし、そんなことかまわないという人は適当にとなる。このことは学校教育がもはや「人格陶冶」の場ではなく、単なる通過点として存在している、といわれることと対応する

コウ……。これは明らかに朝鮮人への侮辱であるといったら皆は笑うだろうか。きっと笑うにちがいない。それは君の考え過ぎさ……。でもぼくは絶対にそうは思わない。チヨンコウと発音するとき、君たちの心の奥底には、必ず朝鮮人へのさげすみ、嫌悪が、いやらしいという意識が存在していないと誰が断定できようか。君たちは心の隅で朝鮮人に対する差別意識を育てているのだ。君はささいなことであると思うかもしれない。しかしぼくはあえて断言する。まさにそのささいであるようなことが、実はあらゆる差別の根底をなすものである。

「評価」と我々の学習

―新しい高校生活を築くために―

三年B組 田名部 益 興

はじめに

昨年来問題になっていた政経教師による『処分』問題が、この一月、一応落着いた。しかし、反安保集会からはじまる一連の状況は、ある意味では高校生活の矛盾をまさまさと暴露したといえる。生徒の授業ボイコット、スト権確立の問題、授業と「人間形成」のつながり(授業に出るのは無条件にエライ・正しいのか、さぼるやつは不真面目か)、さらに高校教育と日米安保条約との関連性の問題、教師相互における教育姿勢および指導・技術・方法などの不一致・

ものである。これらの傾向は3年になるほど強い。また、1年生の大部分は、中学時代のいわば情性でテストはいい点、評価もいい点という固定したフンキが色濃いと思う。

ともかく、現評価体制は受験をのぞくとあまり考えられないような、どうしてもいいようなおかしなものになっている。つまりテストがあるから勉強するということと同じである。多くの人が出欠を気にする。代返なんかもやる。これは出欠が評価の重要な要素であるという理由からなのだが、現在の高校生の無責任、無気力、小市民的なさ、自主性のなさ、そして頹廃……つまり評価の矛盾、さらに高校教育の矛盾を象徴的に示しているといえる。彼らよりもむしろ、この矛盾をさらに推し進めようとしている奴らに怒りをおぼえる。

1 評価と学習との関連

評価の問題はそれ一つとりだして考えることはできない。今の教育行政機構、政府の文教政策、さらに社会の生産関係、国の政治や文化の面などから総合的に考えねばならない。しかし、ここでは一応我々高校生の学習はいかにあるべきかという観点のもとにいくつかの問題に触れながら考えたいと思う。

前節では現在の評価と我々の学習の動機とのつながり、および評価とはなんなのかという一応の問題提起を試みた。ここでその実態をもう少し詳しく見ようと思う。小・中学校を通じて、我々は5段階相対評価をうけてきたことを忘れてはならない。この義務教育期間において機械的、非合理的に五つの段階(5・1は各7%、4・2は各24%、3が38%)によっていわば暴力的に選別された。クラスの者みなが協同して、各人が同じような成果をあげたとしても

(同様にみなが同じようにできが悪くても) 5・4・3・2・1によって差別される。一人の成績が上がれば、その分だけ確実に一人成績をおとされる。一方に優越感を与え、同時に他方に劣等感を抱かせる。この相対評価方式では生徒の学力を直接に表わすことはできない。他人との比較で順位をつけることしかできない。本人の實力を客観的に見ようとする場合、つまり一定の評価基準に対してどうかということは全くわからない。したがって、その評定をうけた生徒が今後どのような学習を進めたらよいか、どこを正せばよいか、どれだけの理解・習得がなされたかなどを知ろうと思ってもわからない。それどころか、ただ、もったよい成績をとれとしか知らされない。相手との競争を励まし、勉強そのものよりも、ただ他人をだし抜いて優位を得ようという勉強の外的な価値意識しか与えない。真理を知る喜び、楽しさは味わえない。高校入学後もこういった意識がひきつがれる。このような評価への見方は日常的にはテスト中心の学習観になることは我々の経験したところである。テストの得点によって、あいつはできる、できない→エライ、バカだ、などの一面的な誤った人物評価を促し、あの人は〇〇大学へ行っているから頭がいい、りっぱな人だなどの錯覚をおこす。そして常に他人に対するある程度の警戒心が要求される。(意識的、無意識的に) 本当のことはなかなか口に出せなくなる。仕方ないから適当に、時には心にもないことをいってごまかしたりする。話していても、たとえ盛り上がった話しの後でも、空しさ、あと味の悪さを感じる。これもがお互いに「なれあって」いる「と思うようになる。これは我々が高校生活の中でお互い同士倒さなければならぬ、という客観的事実からくるものである。テストおよび「評価」によって、我々は

真の勉強というものから疎外されているといつてよい。我々が勉強しようと思うとき、多くの場合、テストおよびそれに準ずる何かによって強制されるときである。したがって圧迫感、嫌悪感は増すばかりである。これらは上級になるにしたがって将来への不安感とからみあいながら意識と行動との分裂の度合を深めてゆく(勉強しようと思ってもできない、受験勉強はまちがっているがしやうがない、等)。強制的な勉強からの解放感(さっぱりした。肩の荷がおりた。など)は、高校入試のあとに大部分の人が感じただろう。しかし、その自由な息抜きもすぐに重苦しい日常生活の圧力の中で消えていった。画一的な束縛を感じ、なんとかしたいという願望はもちながらも、反抗できず、常識的で平凡で単調なくり返しを続けることを強いられる。

このように考えた時、評価の問題つまり、我々の学習に対する評価ということとは当然考え直さなければならない。それは同時に我々の学習はどうあるべきかということにもなる。ところでこの我々の学習という問題を考えるときに最も重要なことは「自分と社会との関係」である。一般的に言って高校生、特に全日制普通科の場合、実際の社会生産という場にはいない。つまり、何をやっていても生きていられる。遊んでいようが勉強しようがなんでもできる。したがってよく「生活がない」といわれるのである。つまり現実的な生き残るための生活(「単なる存在とはちがう生活」ではないということである。だから思考も現実から遊離した超理想的なものになりやすい。その上さらに、毎日教わる教科は現実生活とのつながりがあまりないから(教え方、内容において)勉強はだんだんムダな事、もしくはとにかくつまらない事」に感じられてくる。ここから興味のあ

る科目にかたよるとか実用的なすぐに役立つ勉強へ移ってゆくなどあまりよくない傾向が生まれてくる。(なぜならそういった学習は結局、狭く応用のきかないものになることは免れないから。)したがって学習と現実的な生活(「生産労働」との結びつきは密接に保たれなくてはならない。そこから問題意識が生まれ、学習意欲が高まってゆくのである。生産を離れた社会が存在しないように、我々もまた、そうした存在はありえない。こういった観点に立つことが我々の学習を進めてゆく上での大きな前提を保證する一つの支えになる。

我々の学習については後ほどまた考えることにして、評価の問題に戻る。評価の目的は、前にもわずかにふれたが、まず我々の学力の内容を表わすもの、そして進歩の状況(成果・弱点)を示すものであり、今後の発展を助長するもの(指導・はげまし)でなくてはならないはずなのだ、今まで見てきたように、全体の中で何番という(我々の場合は今のところ相対評価と絶対評価の折衷的なものらしい)だが相対評価にはかわらない)、他人との点取り競争を表わしたものを「評価」といい、我々の学力を正しく示そうとするものになっていない。結果的には相手の「成績」が自分より悪いのを喜んだり、試験勉強などにより投機心を助長したり、地道な努力を拒否するなど教育効果としてマイナスの作用しかなく、さらに前述したような高校生活の荒廃を招く。我々の学習は相手と競争することではない。お互いに助けあい、励ましあってやった方が効果があるだろう。またそうすることによってみんなができるようになれば楽しくなるし、欲びも薄くだろう。こうなれば一層学習意欲も増し、学力、能力も伸び勉強が楽しくなるにちがいない。

Ⅱ、相対評価とその背景

このように見てくると、今日の評価方式(相対評価)は、我々の健全な全面的な発達を著しく妨害していることが明白に理解される。

強制的な義務としての勉強からぬけ出し、自由な、権利としての学習をしてゆくにはどうしたらよいのだろうか。(容易なことではないことはすべての人が経験しているだろう。)まず、今日の勉強するということは、将来の生活安定をうるための資格を取ることとほとんど同じ意味である。しかもそれは他人との競争においてなされている。現在の社会体制がこれを強いているのである。このことはつまり、小、中学校さらに高校・大学へと続く学校教育体系が大本の利益と合致した選別の手段・道具となっていることを意味している。「能力・適性・進路」に応じてという名のもとで中学卒業者のまだ(十分に)表面に出てきていない将来の可能性の芽をむしりとり、あるいはおさえつけ、資本の要求に沿うよう早期に未発達なままで固定し、かたわな人間にしようとするものである。一方では受験教育による詰めこみでかなりの知識を機械的に記憶した、しかし批判力や自主性のない将来の管理者・技術者候補など少数の群を生み、他方劣悪な条件のもとに、基礎的な広い知識も与えずに、特定の技能を身につけた大多数の労働力を生みだしている。例えば職業高校の設備は大企業の寄付にたよることが多く、「連携教育」「産学協同」体制をとり、安価ですぐに使えるように、69年までにはすでに工業関係をトップに二四一科にも細分されている(例・印刷科・秘書科・商業英語科など)。そして双方とも、制度的、内容的に従順と隷属をおしつけ自主的批判的な精神、科学的思考力および創造力の欠如した体制に奉仕する人間を育てあげる、この差別教

育が「多様化」の実態である。競争を基礎におく社会のしくみ、また大資本の要求を「社会的要請」としてあいまいにし、差別・選別教育を正当化し、推進する自民党政府の資本本位の教育行政などにより、我々の心から望む学習の環境、条件は著しく侵されている。

何故こういうような、国民全体の希望や期待に反する文教政策がおこなわれるかということを追求することはここではやらない。しかし、任命制教育委員会、学習指導要領、教科書検定、「国防教育」「神話教育」、そして「期待される人間像」「人的能力開発」論などに象徴される教育の官僚統制・軍国主義化をたどってゆくと日米安保条約と日本の真の独立の問題という政治問題までゆきつくことになり、さらには資本主義社会の矛盾という根本的な問題にまで発展する。我々はとりあえず、日常の学校生活の中の、あらゆる（差別と選別の教育）の具体的あらわれを敏感にうけとめそれに対する抗議と反対の斗いを教師とともに進めてゆく必要がある。そして我々自身が海外侵略の尖兵として動員されようとしている現在、我々は自ら平和と民主主義を守り育ててゆける人間に成長してゆかなければならない。

Ⅲ、評価と学校生活の改革

相対評価のおよぼす反教育的效果、害悪およびその社会的政治的背景を正しくとらえた上で、授業ならびに評価を改革するにはどうすればよいのだろうか。そのためには、やはり、まず我々自身の学習にのぞむ態度を正しいものになくしてはならない。つまり何のために、何をどう学ぶかという基本的な問題を現実の学習と比較しながら正確に把握することである。すでにⅠ、Ⅱにおいて徐々に明らかにしてきたように全面的に発達した人間を目指すことから始まる。

一諸に勉強して、たとえその人の成績が少し悪くなくても、全体の水準をあげるようにする、Ⅰということもいつていた。一人がみんなのために、みんなが一人のためにという集団的な学習をしている。これをこのまま、我々の学習活動に持ちこむには困難がともなうというのは、この教育が選別・差別による支配（Ⅱ競争）下にあるから当然である。だが他方、こういう中で我々一人一人が文断され、孤立させられている今、お互いに心をわって話し合いたい、協力してゆきたいという気持要求がしだいに強くなることは避けられない。それが、今までの個人主義的な学習観を打破し、お互いに結びついてゆけばよいのである。遊ぶときも、歌をうたうときも一人より多勢の方が楽しい。だったら勉強もみんなで助けあい、励ましあってやった方が楽しいはずだ。しかも集団や組織の中で、つまり社会生活を送る上での基本的な規律・民主主義というものを肌で学ぶことができるのである。

このような授業・討論により学習の点検を行なう民主的な考える授業Ⅰと共同的な学習活動を遂行するには、どうしても「評価」をもっと適切な方式にかえねばならない。評価はⅠのおわりで述べた目的（正しく学力を表わし、のばす）で行なうことにする。そのためには一定の客観的に定めうる具体的な目標の設定が必要である。それは当然生徒にもはっきり示され、理解できるものでなくてはならない。この目標に達して、教師は一人一人がどの程度理解、習得したかを確かめ、生徒の学習の成果や弱点を明らかにすることができる。生徒にしても、自分の学力の到達度や努力の跡もわかる。この目標の設定や評価の方法は公正さ、妥当さを貫くため、教師の主観や一方的判断を排さなくてはならない。そのために教師は集団

人類が長い間かかって築きあげた、自然や社会についての、科学的、体系的認識の基礎、具体的知識を学び、芸術文学などの文化遺産にふれながら豊かな情操を身につけ、体力と運動能力をきたえるということが我々の学習のもっとも基本的な事柄である。（Ⅰの中で明らかにしたように、我々はもう一つ生産労働の基礎、技術の基本も学ばなくてはならないのだが、現状ではほとんどできない。今後の大きな課題である。）ここから我々は各自の個性を発見し、将来の進路を自ら選択できる自主性・能力を養うのである。以上のことは客観的に言えるだけでなく、我々自身の要求でもあるはずだ。しかし今まであきらかにしてきたように、今日の支配層はこれに対してあらゆる手段を使って圧殺しようとしている。従って我々はさらに現代日本の変革という立場を堅持しなくてはならない。勉強は社会変革に立ち向う場合にも重要なのだ。

このように我々の要求と「平和的な国家および社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたっとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた、心身ともに健康な国民の育成」（教育基本法第一条）という課題を正しく結合した学習をすることである。

平常の授業の中でこのような観点に立つ学習の実現には、教師と生徒との協力、相互援助によってしかなされない。昨年6月、日本と朝鮮の高校生の交流会に出席したとき、彼らはこんなことを言っていた。私達は、授業をはじめめる前に、何故この勉強をするのかということを先生と話し合う。そして勉強を進めながらその目的や意義を明らかにしてゆく。我々もこういったこと。先生と生徒、生徒同士の討論をとり入れた授業にすることができれば、少しは豊かな楽しい授業になると思う。またⅠもし、1の人がいればできる人が

的に絶えずこれらについて、科学的研究、経験交流を深め、検討してゆき、客観性をたかめてゆくことが必要である。テスト成績・出席の偏重も当然これによって改められることができ、自由にのびのびと学習することができるようになる。社会科教師の一部にあつた、反安保集会出席者に対する処置は、以上の点からみると明らかに非科学的反民主的権威主義的な誤った「評価」である。これとは別に、この処置は我々のもつ固有の権利である思想・良心の自由（この場合、授業に出たくないという）を侵すものであり、今後くり返されてはならないことである。Ⅰ但し、我々は彼らのような一種の日和見（Ⅱ自己満足的）な斗いを支持するものではない。斗いはすべての学友とともに団結し、前進してゆこうとするものでなくてはならないからだ。

さて、このような、教師・生徒がお互いに学習内容の意義、学習状況の点検をしあい、具体的目標の設定と客観的な事実に基づく評価を行えば現在よりはずっと学習活動・高校生活は改善されるが、解決にはならない。いうまでもなく、差別・選別を軸とする反動的軍国主義的教育行政を推進する政府自体を倒さなくてはならないのである。どうしても。

しかし、現実には苛酷な受験体制があり、思想的な理性をも圧殺する勢いで氾濫する退廃ムードの中で、あらゆる分野、あらゆる方法による攻撃がしかけられている。我々の真の人間性を高める学習の斗いは非常に困難である。だからこそ、今こそ、我々はお互いに手をとりあって、話し合い、未来を切り拓く青年としての自覚と、連帯・団結の輪を高め、広げてゆかななくてはならないのだ。

おわりに

多くの人が勉強に疑問を抱き、受験に苦しんでいる。そして我々は絶えず不安と動揺に悩まされる。何か自分を救ってくれるものを追い求める。巷にあふれる刺激物、いつしか心が飢え渴いてくるのを感じる。そういう中で社会と自分との距離がどんどん遠ざかってゆくのをみんなはきくと感じるだろう。自意識が鋭くなるにつれ、すべてがバカらしくなる。観念的な思考をもてあそぶようになる。種々の事柄がバラバラに関係なくさまよっているように思われてくる。社会的な危機感不安感はいった観念の中でだけ感じ、焦り、それが一時流行したヘルメットと棒切れの一群を生みだした。我々はいこうなつてはならない。常に現実生活と自分をしっかり結びつけておかないと、「自分」を見失う。物事は全体的関連の中で、統一的に把握なくてはだめなのだ。精神安定も、生活の活力も、闘いの斗志もここからしか生まれてこない。不十分な点やまちがいはあるだろうけど、一人一人のそしてみんなの高校生活の充実改善のためにほんの少しでも役立てば、本当にうれしく思う。

1971・2

☆☆☆ 語 註 ☆☆☆

△連関▽ つながり

△陶冶▽ 人材を養成すること

今日人間がこうして生き延びてきている事実は、人間と自然との相互関係が成立しているからであつて、人間は自らの内に生活資料を求める事は出来なかつた。自然の中にこそそれを求める事に依つて歴史は造られて来た。人間の人間に依る産出は、人間の増殖という役割を果たし、人間は、それ自体労働力として、或いは内在するそれとして、この資本主義社会の、世界市場的規模に於ける、需要であり、供給物資を生産する存在、すなわちそれらの総体即労働力の再生産たるものである。日本国に於ける一九七一年という情況下に我が位置する事を直視するなれば、現在日本は、資本主義体制の一翼を担う、第三の大国等と言われる強力な資本主義国家である。そこに於ける分業支配体制で、生活に必要な諸物資を得る為に、人間は或る一定の労働に携わり、生産する。その労働の代償としての賃金を媒介に他の生産諸物をも共有する事が出来る。今日生きるとは、その所謂「労働」ということが大前提なのであつて、我々高校生たる存在も、親の労働の報酬を前提に生きているのであり、これなくして、我々の諸観念・諸々の欲望も満たす事は不可能なのだ。我々も、当然の事ながら、この教育体制を抜けるや否や、時間的未来として、現社会の労働組織の中へと組み込まれていく。

日本に於ける、資本主義社会抬頭以降の、歴史の本質過程の展開（生産関係・生産様式の発展過程）

「士農工商職多非人の如き身分制度を主軸とする封建制社会の克服をその前提条件とする近代資本主義体制は、自らの労働力を商品として売る以外、生きる術のない自由な賃労働者群の再生産を基本

現行教育体制に於ける

「評価」の本質的問題

三年C組 藤記豊士

「新制高等学校は、その収容力の最大限度まで国家の全青年に奉仕すべきものである」「入学者の選抜は、やむをえない害悪であつて、経済が復興して、新制高等学校で学びたい者に適当な施設を用意することができるようになれば、ただちになくすべきものであると考へなければならぬ」（新制中学校高等学校の望ましい運営の方針・昭和二十四年四月）「高等学校は、義務制ではないが、将来は授業料を徴収せず、無償とすることが望ましい」（新学校制度実施準備の案内・昭和二十二年四月）

そして、あの新制高等学校創設から二〇年以上経つた今日、戦後の高度経済成長政策の波に乗つて、目覚ましい復興の栄光の途を歩んでいる。一九六九年には、ついに高校進学率は全国平均八〇パーセントを越え、特に東京都に於ては、実に九九パーセントという最高の数字を示している。今や高校の義務教育化が叫ばれ、大学生も五人に一人という現実を呈している。「学びたい者は全て学べる」教育の理想を現実化するという所までは、後僅かな様だ。

が、しかし……その本質は如何なるものか。

まず、第一に……「生きる」ということの本質的問題の確認。

的な存続条件として確立する。封建制度下に於ける労働は、特定化されており、技術的代替性のあるものではなかつた。技能の特定化は、社会集団（ギルド等）の特定化に支えられ、労働を常に特定の労働としてのみ現象させ、それ以外の労働として実現させないという、生産手段との結合の社会的固定化が、身分の内実であつた。この意味での労働の特定化からの解放過程は、歴史的には、マニユファクチャーの進行発展過程として実現される。

マニユファクチャーに於ける生産技術体制とは、特定の手工業用具と結合した、職人労働の組み合わせ的体系として発生した。それは当初から一定の熟練度を前提とする職人労働及び個々の職人と結合した手工業用具という生産の社会的技術的制限を有していたのである。この克服過程が、同時に身分制の克服、即ち、特定の生産手段との結合からの労働の解放過程となる。マニユファクチャーの発展は、工場内協業・労働過程の分割を産出し、所謂分業を工場労働の規定的形態として展開するに至る。分業の展開は、マニユファクチャーに付随している生産の技術的制限を除去する方向に進行する。分業の発展（即ち労働過程の分割形態の発展）は、個々の労働を全労働過程の部分として固定・自立化し、労働は部分的労働となり、労働用具たる手工業用具は、益々個々の細目的労働を可能たらしめ、他方で、職人的技能を排除していく。それらを内実とした発展は、労働の単純化・道具の多様化即機械創造の前提を創出した。

マニユファクチャーは、ついに自己を否定する。道具は姿を消し、職人は消去し、機械が発生する。そこに新たな労働力編成が開始される。機械は多様化された道具を動力と結合し、職人名人芸を機械化する。労働の質は単純な代替可能な労働の質へと転化させられる。

この様にして、労働力を商品として売る基礎に特定の生産手段との結合から自由な労働が誕生する（資本―賃労働関係成立の基礎の創出）。資本は、その本性である価値増殖遂行の為に、一方で職人的道具体系を分解し、他方で、職人的労働編成を、誰でも何時でも何処でも為し得る単純労働編成を原理とする賃労働者群の貯水池として形成した。〃職業選択の自由〃、〃移住の自由〃、〃ギルド解体〃、〃四民平等〃等々、近代を特色付ける諸制度は、この近代資本主義生成の条件でもあり、又、その内実でもあった。これら諸条件の確立は、労働者を生産手段から切斷する事を意味すると共に、固定的世襲的身分制の枠からの諸個人の解放を意味した（個人主義理念の発展）。しかしながら、ほぼ今世紀に入ってから固定資本の巨大化を一契機とする生産技術体系、延いては資本蓄積形態と、それに伴う競争条件・競争形態の変容は、資本主義に一つの大きな性格的变化を与えた。

資本主義の帝国主義期がそれである。この時もはや封建的束縛から自らを解き放った自由なる賃労働者群ではなく、各々の泳ぐべき水路を個々人分断的に与えられる以外、賃労働者としての資格さえ見出し得ない様な賃労働者群である。換言すれば、帝国主義期に於ける絶えざる技術革新が要請する労働力は、単に職人的特定性を克服するといふのみならず、その上に立って、新たな特定性を付与された労働力である。それは、個人的流動的な能力を内実とする特定性である。絶えざる排他的技術革新をその生存条件とする資本は、個人的能力によって定められた分の枠内での大幅な代替性・即応性を持った労働力を、持続的・効率的に用意し育成しておかなければならない。そういう形でしか、資本再生産の必須の要件たる賃労働者

の貯水池を形成する事は出来ない。即ち、何時でも廃棄処分にし、同時に何時でも新たな労働力を補給するという資本の本性が満足され得ないのである。それは専門能力育成という形を取らざるを得ない。一人一人に対して、それは与えられた分の中で、最大限適応性を身に着ける事を個々人に迫っている。

分相応の適応力の供給源として、学校教育に公教育が工場化されているのである。」（教育秩序に総叛乱を！全都高校生・浪人斗争連合―改訂第三版第三増刷からの部分引用）

以上の様な、資本主義体制の進行に伴う、日本に於ける教育の改編過程

戦前の教育に見られる、教育内容と卒業後の資格も違う〃複線形〃の差別的中等教育制度を廃止して、〃総合性〃、〃小学区制〃、〃男女共学制〃という高校三原則を基軸とする新制高校は、一九四八年に発足された。その基本理念とする所は、〃将来の進路や男女の別なく、共通必修課程を学び、その上に個人の適性・進路に応じた選択教科を自由選択する〃というものであった。ところが、歴史的要請（資本の要請）に応じて、それらの基本理念は、国家の官僚統制によって、差別的教育制度へと次々に改悪されていくのである。

一九五一年の「政令改正諮問委員会」答申は、これまでの教育制度は日本の国情に合わないものとして、〃中学校からの普通コースと職業コースの分離〃、〃総合制高校の分解と学区制廃止〃、〃職業教育の尊重による普通・職業両課程間の格差増大〃、〃六年制高校・高専の設置〃、〃教育委員会の任命制〃及び、国定教科書制度

を示唆する〃検定制度の設置〃等を内実とするものであった。

同年、「産業教育振興法」が制定された。〃産業教育の振興〃、〃内容改善〃、〃施設設備の充実〃、〃教員養成〃、〃業界との協力と合わせて経費等の国の負担を制定〃国の補助金を受ける為には、専門的実業教育を受ける生徒数が入学当初から決定されていなければならず、従ってここに、確実な生徒振分け制度が必然的となる。

「再軍備のための愛国心涵養のため、歴史・地理と国体・民族の優秀性を教える教育」の強調（吉田首相・昭和二十七年十一月）、「池田・ロバートソン会談」（昭和二十八年十月）に於ける日本再軍備促進の為に、青少年の愛国心教育の強調や、警察予備隊から保安隊を経て自衛隊に至る再軍備の歩みも、はっきりと指導要領に写し出されている。

「新教育制度の再検討に関する展望」（昭和二十七年一〇月・日経連教育部会）、「当面の教育制度改善に関する要望」（昭和二十九年一月・日経連）、「新時代の要請に対応する技術教育に関する意見」（昭和三十一年一月・日経連）、等を背景に、五六年、指導要領改訂なる。これら資本の要請は、社会的時代の要請とされて、教育に忠実に反映されていく。個人的エゴによる競争が始まり、有名大学志望者の旧制名門中学への集中現象を起こし、それらを頂点とした学校格差が復活する。その現象をさらに固定化した制度が、五六年の高校学習指導要領改訂である。教科自由選択を大減し、必修教科を増し、普通科に五類型を設けた。そのコース選択の自由の内実は、テスト成績による選別にあり、進学・就職の区別を確立した。ここで、当初の教育基本理念は粉々に分解させられる。教科の中の社会科の変化は著しく、道德教育等の公民科の性格へと再編成さ

れ、科学的・論理的・体系的思考性等の欠如の一因をなす。

五八年に始まる教師の勤務評定は、自由な教育を限定し、中央集権的管理体制を確立していくに及ぶ。

六〇年の指導要領改訂に於ては、さらに各教科にA・Bの内容差がつけられ、普通科・職業科、全日制・定時制、通信教育間の格差が拡大する。上から用意された多様なコースに、生徒のテスト成績による、能力・適性・進路に応じて、個人的希望に係わりなく、生徒をはめ込むよう、教育課程を改編していくのだ。文部省はその後、小・中学校の全国一斉学力テストを六一年以降実施する。それは、政府の「国民所得倍增計画」に対応する文教政策として、〃人材開発〃、〃能力主義〃による早期選別の客観的資料となる。

次に、政府の教育課程再編の為の、指導要領の地位変遷をみる。一九四七年に於ては、戦前教育の中央統制による画一性を反省し、民主的な国民を育てるには、現場教師が地域・児童の特性に直接接する所から、自発的創意工夫を進めるべきだとし、一九五一年の指導要領までは、〃試案〃とされていたのに対し、五六年改訂には、上からの強化が進行し、五八年には、官報に告示するという形式に至り、再び国家権力による教育統制を現実化する。具体的教育の基準たる教科書に対する文部省検定は、五三年「学校教育法改正」によって、検定権者が文部大臣に移行してから急速に強化され、五六年、文部省は「教科書調査官」を設置する。その検定の不当性を追求した五五年の日本民主党「うれうべき教科書の問題」は、各種の圧力を受けるに至り、ついに、六五年、家永三郎氏は、教科書検定を違憲とする訴訟を起す。六三年「教科書無償措置法」によって、教科書の広域採択制や、出版企業の指定制等が規定され、現在全県

一種を含め、殆どの県に於ける教科書は、二、三種類に制限され、内実共に教育の画一化と統制が、その当初の教育観とはまったく逆流した形で進行する。

六三年には、中教審答申「大学教育の改善について」（昭和三六年一月）の方針に基づいて、「能力開発研究所」が設立され、「能研テスト」が実施されるようになり、一層の差別機構の精密化を押し進めていった。

六六年一〇月、中教審の「後期中等教育の拡充整備について」（期待される人間像・付記）が答申される。それは、教育内容の画一化に欠点があるとし、高校進学率上昇に伴い、生徒の適性・能力も多様になったが故に、技術革新時代の社会的要請に応え、高校教育を多様化すべきだ、という要約である。理数科の様なエリート向けの学科を一方に置き、他方職業の分化に即応した「秘書科」、貿易科等々の形で、低度技能労働者養成の為の小学科を設けたり、新しい科目を様々に取り入れ、又、定時制や通信教育は一層企業内訓練に密接に結びついていく。これらは決して個人の希望から出た多様化ではなく、資本の要請に応えたそれである点で、真の意味での教育に真向から対立する害悪なのだ。

さらには、「神話復活」、戦前の「家父長制・良妻賢母」に対応する、「男らしさ・女らしさ」の強調・制度化など、まさに現代の教育は、反動化の一途を辿っているのだ。

教育というものは社会からあたかも離れて存在するかの様に見られているらしく、我々の政治活動でさえ公然と禁止され、自治活動は徹々たる存在でしか保ってはいない。以上の様な歴史的背景を見ていくと、そこに於ける「教育の中立」の理念は容易に政府による

中央管理体制にすり替えられてゆく。そもそも学生側にしてみれば、流行語にもなった三無主義等に極めてよく象徴される様に、学生は学生であり、学生というものは、ただ与えられた知識のみを貪欲に呑み込んでさえいれば良かったのだ。それは限定された知識を、である。現在の教育多様化現象は、資本の要請により、義務教育から教育内容に差をつけることによって、中卒者の一部を労働力として確保した上で（曰く金の卵の争奪）、高校の教科・科目の細目化、及び履修単位の操作等によって、教育内容の開きを一層大きなものとし、普通科に於ても、進学・就職を制度的によりはっきりとした形で分けることをその内実とする。技術革新による高度資本主義社会発展の為、科学技術発展を基軸とする経済発展に必要な、同一年齢層の三（五）パーセントに当る科学技術的エリートと、大量の安価で良質の若年労働力をどのように育成するか、という課題に依る為、公立校の普通科増設を出来るだけ押え、進学者を職業科に振り分け、六三年九月、学校教育法施行規則を改正し、入学志願者が定員に満たなくても、必ず学力検査によって選抜を行なう事とした。これらの制度により、「すべての国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する」（憲法第二六条）、個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない」（教育基本法）等々の、本来の教育の理想から大きく外れ、害悪とさえなり、これらの制度下に於ける我々の学習は、単なる振り分けの為の強制労働と化すのである。

我々を実際に教育している学校側の教育基盤、そしてそこに於ける評価とは如何なるものであるかを知るものとして、以下に、昨年七月七日に於ける、秋田明大講演会事件に関する生徒大会の、学校側解答を引用する。承知の通りこの講演会は、生徒多数によって開催要求となり、学校側がこれに反対し、そして、秋田氏自身これを拒否したという経過の中で、その本質を追う事は、非常に意義あるものと考える。

秋田氏の講演に反対する理由として（中略）傾いた人の意見を全校生徒に聞かすのは、教育の中立をそこねる云々……

（前略）

職員会議決定

一、学校は公の管理のもとにおかれ、公の性質をもつものである。このため学校は都教育委員会の運営上の指導をうけなければならない。

このようなことを基礎となして、本校は教育方針として云々……二、学校は、今述べたように、公的な機関である。また社会は調和の上に成り立っており、公的機関である学校は、その社会の中に存在しているものである。したがって教育の本筋を考えてみると、その講師の思想が、ただ突発的におこり、持続しないものでは好ましくない。学校としては、社会的な評価の安定した人をえらび、生徒の糧としていきたい。

三、最後に、秋田氏は現在公判中の身柄である。このことはいまのべた学校の社会性を考えるにあたって、問題となる。また、

（後略）

この解答は、前述の教育改遍過程と合わせて考察してもらいたい。学校側が秋田氏に対して評価したと同様に、それは我々に、当局の処分権行使等の形式で返ってくる。学校という公の教育機関は、矛盾を敢えて言わざるを得ない。それは苟も教育労働者だからだ。なるほど、教育は中立であるべきだろう。社会は調和の上に成り立つのもうなづける。だが、この学校側がよく口を揃えて言う「公」だの「中立」だの言葉は、この体制に実在しない。「公」は「体制」であり、「指導は」絶対的強制力である。社会は調和の上に成り立つ、と言うからには、様々な側面の事実を必要としていると思えば、社会的な評価の安定した人、と限定してくる。処分権教育の自由を一定期間或いは無期限に奪い取る権利も、評価の一方方法たる存在で、決して指導ではなく、秋田氏に下した一定の評価は、秋田氏の講演の本質に対する評価なのであって、その力は、講演が成立しないという行為に決定的に作用する。生徒の意志とは無関係に、事が決定され、運営され、絶対的圧力となって下っていく。「突発的」だの「思想の社会的な評価の安定した」だの、そんなものはある筈もなく、そういう諸々の事を列挙して「公」という名の下にそれらを根拠にして反論している所に、問題の本質がある。それはただ単に指導に則る一意見ではなく、場合によっては国家権力でさえ（暴力的介入として）介入してくる一方的強制力である。社会的な評価の安定した思想は、ブルジョア的思想である。それは突発的ではなく、それなりの根拠を持ち、なるほど持続して支配している。それが我々の糧であるというのだ。この様に安定されているにもかかわらず、「常に真理と正義を友とし、科学的な研究心と健全な批判力及び鋭い道徳的感覚と逞ましい実践力を身につけ」（生徒手帳

・本校の生活の本領）等というのだ。その様な信念の下に、この資本主義体制打倒を掲げる時、当然その規定を外れるのだが、それを理由に処分を下すとすると、教育の理想というものは宙に浮いてしまふしかないだろう。社会的秩序や乱すとして、虐殺・迫害された人間の思想・行動が、歴史を動かして来た事実を、この教育者達はどうしようとするのか。

三について一言。仮に最大紛議歩して言うなれば、あの偉大なる日本国憲法に則ってここに言明する。現在公判中の身柄なら、何人とも犯罪者とはなり得ないのである。例え犯罪者だと確定された所で、「犯罪とは何か」の本質の問題に迫らなければ、何の根拠もなくそれを理由に挙げるには、本質をぼかす所か、それ自体社会的犯罪となる。「暴力は、社会的にみて、人間の普遍的道德悪であるから、どの様な根拠にせよ、それは正当化されてはならない」と言っている時、我々の後ろに大きく胡座をかいている国家的規模の暴力は正当化されているという矛盾を、どう解釈するのだ。それから権力には、やはり何らかの根拠を有しているという事実は、どこに隠し消し去ろうとしているのだ。都合のいい時に、「中立」だの「普遍的」だのを持ち出して来るに過ぎないのだ。

我々は試験を拒否するのではない。評価基準を拒否するのではない。評価基準を拒否するものでもないし、ましてや学習を放棄するのでは更々ないのだ。だが、現実的な教育体制に於ける「評価」を、徹底的に拒否していかなければならない。それがどの様な根拠の下に為されているかを見る場合、我々の真の学習を妨げる以外のなにものでもないからだ。次の文を見てもらいたい。

対的強制力を伴う場合である。我々には、評価という一つの価値基準が必要である。その一規定が明白にされてこそ、それを超える事が出来るのである。その意味で、己の追求態度に絶え間なき努力という言葉が生きてくる。それによって、評価は決定的なものではなく、いくらでも流動する。では事実はどうか。というと、まったくの逆である。我々は一定の評価基準の下にこの学校に入ってきた。そこに於て、評価とは決定的なものではなかったのか。ここで、所謂評価に対する万人の共有する所の理念と、実際の評価とを混同してはならない。この現教育体系に位置する評価の本質とは一体何か。それは、「成績評定」と、「単位認定」の相互関係に集約されているのだ。それらがすなわち全人格をも意味している所に問題がある。我々は大学受験を考える。とりわけこの新宿高校に於て。そこで要求されるものは、卒業証書による高卒（普通科・全日制）という認定と、成績証明書による学力の程度証明との他に、何があるだろう。現在日々進行している技術革新等によって、一方で、労働力の高度な質を要求され、それに答える為、さらに高度な質を有する大学院大学や理数系の新設や、あらゆる目的に合致した多角的教育時代を邁進し、能力を最重要視した内申書採択等、その決定的手段となる成績証明書、そしてその具体的なものとしての試験に、我々高校生の全てがかかっているといっても過言ではあるまい。何故なら、それによって、我々の一生の方向性が決定されるという、全生活がかかっているのだから。無論それを否定する人は少なくはないと思う。しかしながら、その様な思考性は、ある程度の社会的安定、或いはその可能性を持った人々に共通な理念である。低賃金労働者は、やはり低賃金労働者としての存在でしかなく、その階層が存在する

「……：数学教育協議会（数教協）は、すべての子供に、算数が楽しく分かる為には、現行指導要領ではなくて、こうでなければならぬことを、実例をもって示したのだが、これだけで……：気狂いじみた弾圧を受けねばならなかった。……：数教協の研究と実践のもたらした第一の成果は、算数、数学というものは、とくに脳に病理的な欠陥がある場合をのぞき、すべての子供にとって、言葉の正確な意味で、完全に理解可能であることを確証した点にある。その確証はいわゆる精薄児をも絶対に例外としないのである。このことの意義は決定的である。その意味は、現行教育がいかに子供の自己教育に理解の過程の法則性を無視して子供の頭脳を系統的に破壊し、その結果鑑別と差別を教段にわたってくりかえして、権力エリートと被抑圧者の数階層に分岐させるといふ、犯罪的なものであるかを、白日のもとに暴露したという点にあるだけではない。重要なことは、能力差などという観念は、実はまったくのデマであり、人間は平等であるというのは、理想や政治的スローガンではなく、一つの人間に関する事実的真理であることの確認という原理に対してである。……」（倉田令二郎氏・新数学観構築の原点―展望一九六九年七月号から）

あらゆる意味での評価というものは、それらが真に建設的な方向にあるのなら、非常に重要性をもってくる。又、そうでなくても、評価が、自由な相互関係に基づくものならば、どんなデマであったとしても、すべて重要な事実として存在し、それらは、唯一弁証法的思考性によって、止揚された統一的な真理へと向かうと考える。そこで、問題となるのは、その評価が、制度化された、上からの絶

からこそ、この資本主義体制が存続しているのだという事は、すでに前に見た通りである。当然ここで取り上げねばならないのは、高校全般になるのだが、それらの根本に共通する問題点を見る事にする。高校生活には様々な言葉が現われる。「クラブ活動」、「人間関係」、「真の友情」、「恋愛」、「ホーム・ルーム」、「生徒会」「政治活動」等々。そして「試験」よく言われている両立とは、前者諸々を向こうにまわしての、「試験」との両立の事である。それ程までに、我々と試験とは切り離せないものなのだ。我々は学生である。学生の第一の本分は学習にある。それを忘れて政治活動などとは以ての外だと言うのだ。ごもっともな話である。だが、我々の学習の目的とは、それ程までに純粹なものであろうか。何の強制もなく、自らの努力の結果を知ろうとする基準を、試験に託しているものなのだろうか。事実は否！である。「試験は関係ない」とか「試験は単なる基準である」等と言っている人間をも含めて、断固、否！である。試験あっての我々なのだ。仮に試験を受けなかったのなら、事実は明白となる。我々は評価の対象外となるばかりか、容赦なく追放されてゆく存在なのだ。現実には、勉強しなくなった人間が、その結果として評価が下がってゆき、その結果さらに悪い方向へと向かい、最終的に放逐され、取り残され、の悪循環で、「お前は努力が足りない」だの「もともと能力がない」だのと言われている。しかしながら、やはり成績が落ちるのはなんともみっともないものだ。自分が悪いのだと思ひ込んでしまう。それ故に、それを恐れる我々は、たとえまったく勉強していなくとも、その評価を与えてもらう為に、白紙答案であっても提出しているのだ。ここに、

それ程までに強制的な評価というものの問題性が頭わになってくる。両立、両立とあえぎ叫びながら、生徒会の生徒不在、H・Rの価値不在、クラブ活動の低迷、一夜漬現象、教科書とアンチ・コの置換現象、その他諸々の現象は、当然の帰結となつて具象化する。高校生という、何の生活保証もない不安定な我々は、だからこそ努力し、高卒（新宿高校・全日制を何番で卒業）というものをステップに、大学へ大学へ（某大学・某学部・某科）よりはっきりと未来的生活に規定力をもつ）、という希望？を満たそうと先を急ぐ。それを決定する評価。我々が懸命になるのも当然である。その自己弁護の言葉は、〃我々がやりたい事をやる為には、どうしても必要な条件を獲得する〃という、固い信念？の下に飛翔していく。

知識は全ての人に共有されるものである。それには何の報酬もない。それを得る為には、知識を社会に活用した時のみである。それが生きる手段なのだ。それが例え自分の希望した生活様式であったにせよ、そこに於ける人間の労働力商品としての本質的価値は動かせない事実となる。その歴史的根拠はすでに以前の段階で明らかにしてきた。我々は高い、それより高い労働力商品となる為に、日々日常を暮している。ここで再度言う。知識とは、全ての人に共有されるものだ。欲しようとするならば、必ず掌中に出来る。くず屋のおじさんが、大学教授以上の知識を持っていて当然なのだ。それは単に専門バカではなく、高範囲のそれでも。くず屋という職業が、社会にとって不可欠であるならば、我々は彼に最大の敬意を表しよう。だが、現実はその単純に理想ではない。それだけの人間なら、すでにくず屋という職業にはいないだろう。或いは又、自己に純化させただけの本当の人間なのかも知れない。実際には、低賃金

も、形式主義に終始し、そこから生まれた個人には、絶対的権威の評価によって、個人を死に追い込んでいる。誰もが口を揃えて、〃彼の努力が足りなかったのだ〃とか〃無能は所詮無能〃とか言つて、その個人を一層無能な、犯罪者に仕立て上げる。それでもなお、この社会は矛盾だらけだと言つて、かわいそうな奴だ、とエリート意識だけはお高いのである。

我々は環境によって規定され続ける。人は環境の産物である。環境から生まれた我々は、その環境に影響されつつ、その環境をも変えてゆく。だからこそ歴史は動き続ける。そして、我々として、世界史内存在であり、その歴史を動かし得るのだ。我々の一定の思考性は、それまで通過した過去の中での、一定の知識の上に成り立つ。

我々は中学という一定の義務教育機関を通過して来た。成績評定による不断の個人分断等によって貫徹された教育は、高校進学・就職等に結果する。資本の必要に応じて諸個人に特殊な有用性としての専門能力を使用対象性として賦与する教育資本は、さらに高度化する。人は個人的エゴの努力しだいで高い労働力商品となり得る。それは、一流高校・一流大学等の受験地獄に留まらず、各分断された学校内での、その受験等に規定された、主観的目的を同じく共有する個人同士で競争し合う事によって、個人々人を分断する。自分がより高い労働力商品に納まる事により、又別の誰かがそこから蹴落とされ、その誰かが別の所に納まる事により、又別の誰かが押し出される、という繰り返しである。曰くこれを〃職業選択の自由〃という。〃実力主義の時代〃ともいう。〃人は努力しだいでどうにでもなる〃と、近代資本主義の最大の特徴の一つである。なるほど人は、ある一定範囲内で流動するが、社会形態が動く訳ではない。

労働者は、それだけの能力しかないのだと思ひ込まされ、馴化されていったのだ。その個人々人に見ても、我々に見ても……。だから、やはりそれだけの人間だと思われても仕方がない人間が多い事も又現実である。この資本主義社会では当然の価値観である。そしてその制度化が、現教育体制なのだ。我々の目的が空洞化しているにもかかわらず、我々の日夜は、成績を上げる努力というものに明け暮れている。

社会とは網の様なものだ。どの糸一本切れたって、それは網としてはもはや役立たない。網目の無理な相互的力関係から、又は突発的事故から、一本の糸が切れてしまふ。網全体を換えるのではなく、その糸一本を修繕する。その糸は、修繕されたという汚名をきせられる。糸一本はやはり糸一本であるが、その糸が、網としての存在である所から、その原因は、網という全体にある筈である。社会は社会を葬り去る事はない。その社会とは唯一それを構成している個人々人から成り立っている。にもかかわらず、その構成員たる個人を葬る事は平気で遣り遂げる。その個人が犯罪者だからだろうか。不良と呼ぶにふさわしい無能なる人物だからだろうか。では、その犯罪とか無能とかいう個人に対する評価とは一体どこからくるのだろう。

資本主義社会の競争を反映させた、競争の為の個人主義的学習。それによっての個人格差の分断。さらには学校格差の序列化。その資本の要請に応じた多種多様な分岐をみる重層的な分断に支えられ、資本主義社会延命の為に、イデオロギー注入も、教育の中で行為的に進行させ、その現体制をそっくり反映させた教育制度、教育政策に起因するのである。その教育制度に改善の余地あり、と言いつつ

我々を労働力商品として上から下まで節い分ける。そこに階層の存在がある。評価はその為の道具となる。社会的基準として、その絶対的重要・必然性をもつ。

知識は学校のものでもない。ただそこでは容易に、しかも有効的に手に入るだけのもので、それは万人に共有されるべきものである。新制高校創設時の、教育に於ける基本理念等を思い出し、ていただきたい。それがやはり理想だと私は信ずる。だが、その改編過程をみていくにつれ、無惨な姿に変容していく。本来、人間関係が主体であつた筈なのに、我々が受け取るのは、荒廃した精神だ。我々はだからこそ路頭に迷う。学生は勉強しなければいけないし、でも：周りが気になって：孤独・空虚・戦争・公害・殺人・不信・生徒会・クラブ・友情・恋愛：でもやっぱり試験が：そして大学入試が：……。

ここまで発展した社会の中で、分業体制は必然的だろう。だからこそ、最低限度の生活手段としての能力は絶対不可欠となる。そしてそれが唯一自分のやりたい事で、労働が最大の楽しみと化するなら、こんなすばらしい事はない。が、しかし、その生産関係・生産様式を包摂する資本主義社会の巨大な機構の中で、我々自体が、人間との結びつきなく、単なる物質に疎外されている。学校での、又、あらゆる社会での努力とは、すなわち競争という形態を取り、学校でのそれは階級の萌芽として、そして社会に於けるそれは、階級闘争の死活問題とまで発展する。真の意味での教育を求める時、そして全人民の連帯の中で己が本当に生きようとする時、この資本主義社会を崩す以外に、我々の新鮮な空気を吸う自由はないのだという事実を、ここに確認しなければならぬ。

我々は様々な現象を見る事が出来る。あるがままに捉える。どん

な事であろうと、それは事実として存在し、例えそれが誤謬だとしても、それを知る為には、現象―実体―本質の下向過程を辿り、本質―実体―そして現実的なものとしての把握・対象化、それが認識の上向過程であり、変革の原動力なのだ。我々はまず感性的に知る事が出来る。現行評価には本題がある。人間が疎外され、精神が荒廃し、何の為の勉強だかまったく分らない。就中、生きるって何なのだろうか、と。それら我々が感じる観念は、この環境が産出したものとして把握できよう。その環境とは、前に述べてきた通りだが、その環境にこそ問題がある。教育者が評価するそれは、個人が個人を評価するそれとは本質的に異り、それなりの歴史的根拠・必然性を有した。現体制に育成され、体制の要請によって権力を請け負わされた地方公務員によるものであるという事だ。それ故我々は、その指導の下に、有能なる社会の構成員となるのであり、その評価は、社会的比重をもって君臨する。その教育機関の権力は、行為的には実際の教育者の掌中にあり、その教育者にしても、自らが管理していると同時に、管理されている立場であり、本質的には、この体制の中央集権的国家権力（＝資本主義社会に於けるブルジョア意識総体、及び、資本の論理を根底とする経済機構を反映した社会体制の物質的規定形態）にある。教育に於ける評価とは、資本の要請により初めて成立するという転倒現象をみる。評価を問題にするのは、この資本主義に貫徹された、教育に害となる評価なのであって、何も評価の形式を変革するという事では絶対にあり得ず、この側面、或いは全面に現出した評価の実体を暴露するに留まらず、当然の事ながら、その根源たる資本主義国家そのものにまで発展し、本当に教育を考えるならば、それとの対決を余儀なくするものである。こ

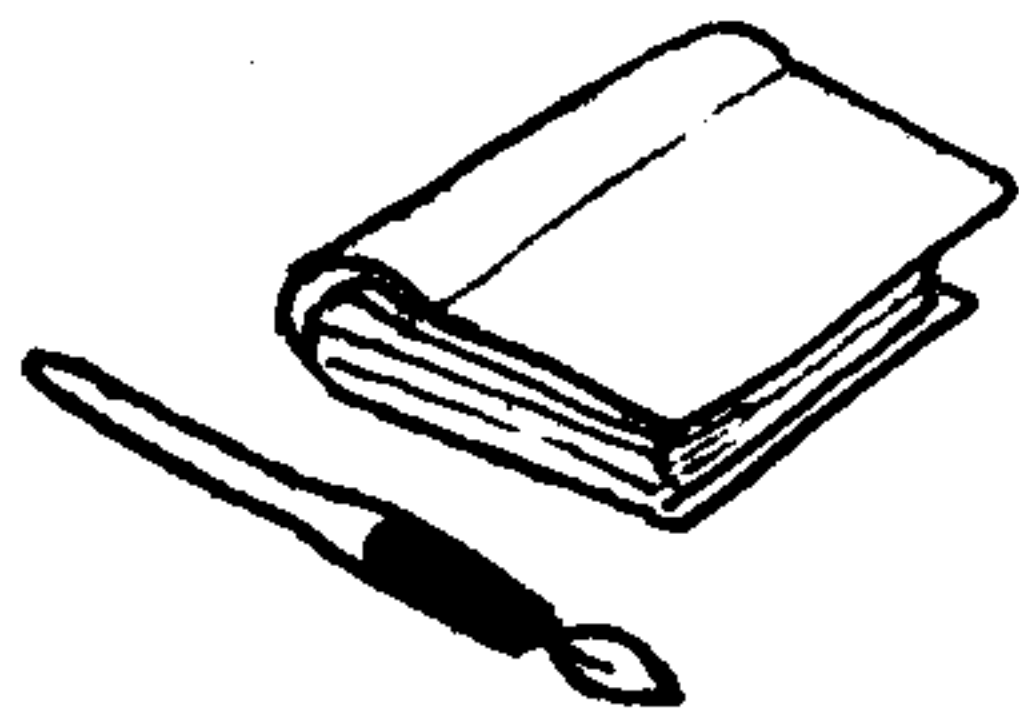
の不可避な対決を避け、評価の形式を変えてみた所で、教育や、その中から生まれ出る人間の理想的な姿は、見出す事は出来ないのだ。我々は社会の一翼を担う存在としての学生であり、絶え間なき理想の追求を、現実社会に具象化し、次の社会を目指す教育を獲得する、教育の真の姿を進めようとする中で、社会の有能なる構成員を養成目的とする現教育体制は、しかしながら、現社会体制の一環として、資本に追従し、そのイデオロギー注入の重要な地位をしめているばかりか、その社会の矛盾そのままの形態で教育の場に持ち込み、教育資本による工場化となり、まさに真の教育とは程遠い妨げとなっているのである。

私はここに一つの不完全なる論文として提出する。ある一定の、例え誤った基準であっても、その実在がなければ、次の何かは期待としてのみの存在こそあれ、ただの何の役にも立たぬ幻想に過ぎない。ある一定の何か、とは、この資本主義社会の発展過程に至る全ての過去の事実である。その中から見出した、史的唯物論的普遍的価値観である。それは弁証法によって支えられ発展するものである。我々はそれを真に我々のものとする事が可能である。我々の精神の理想たる姿がいまだ死滅しない限り、我々は明らかなる矛盾を、この社会に見るだろう。我々の変革すべき根拠はすでに我々の内に在り、我々を抑えつけようと用意された諸々を、今、敵として向こうにまわし、鉄槌を振り翳し、満身の怒りをもって微塵と化してしまわなければ、ただ我々は歯軋りして、精神どころか肉体までもが腐敗してゆき風化され、一粒の塵となって大地に眠るしかないであろう。まずそれは、我々の観念の世界で獲得し、その対象化を、我々

の全存在を賭けて押し進めていくのではない。

最後に、私の好きなマルクスの言葉を引用して、終章とする。

「狩人・漁師・牧者または批判者についてなることなしに、私の気のおもむくままに、朝には狩りをし、昼には魚をとり、夕には家畜を飼い、夕餉の後には批判をする」



新宿徒然草

小話

先生が何か言っている

となりの奴が授業だと言う

黒板にいくつも四角を書きそれを線で結ぶ

これが問屋だ

ここで君達は買う

これは不便なものだと思いかね

オレは不便だと手を上げた

頭のいい奴が便利だと立った

そうだ、そうだそうだ

そうだそうだ

実に！そうだ！

そうだよばかだなあ

オレは今でも不便だと思っている

クラブ報告



人文科

地理歴史研究部

名前からもわかるように、このクラブは我々をとりまく地理歴史経済などを調べるクラブです。また、ハイキング部とか旅行部とかいうあだ名もある程、よく走り、また歩くクラブです。ちなみに、昨年は多摩川の源から河口までを電車に乗り、歩き、また車に乗って調べましたし、昨年は遠く本州の最北端である下北半島へ遠出をしました。

クラブの性格紹介も兼ねて昨年の報告を致しますと、まず一学期中に場所を決め、また調査方法やその装備などの準備を始めました。その上で夏休みも終りに近づいた八月の十八日、現地へ向かって出発しました。そして翌日十九日から五日間でむつ市、東通村、大畑

村、風間浦村、不問村、佐井村、脇野沢町、川内町の八市町村を廻りその主だったところを調べました。最も調べるといっても、大学の研究のようなくわしいものは時間的にも金銭的にもできかねました。しかし、そこでの生活や産業に触れ、啓発された点も数多くありました。貧しい漁村、荒される自然、不便な交通などをじかに感じ、感動させられたことも、二度や三度ではありませんでした。そして学園祭ではその時の調査を「下北半島」と題して発表展示し反響をよみました。昨年度は人数も少なく、また本格的な調査もおくれでしまい、あまりよい研究はできませんでしたが、今年は昨年を参考にしよりよい研究を仕上げたいとみなはりきって活動しているクラブです。

Y・H班(ユースホステル班)

昨年、有志が集まりクラブとして発足する

予定であったが、現在のところ都合により地歴部に寄生している。この班に加盟しているも宿泊費は規定料金であるし、交通費も自前である。しかし我々はこのY・Hの精神で親厚くを計り、規律を守っている。昨年は7月の下旬、長野県の木崎湖畔で二泊三日のオーブンホステリングを行なった。最初の日、朝のうちはあいにく雨なども降ったが、三日間好天に恵まれハイキングやミーティングなどを行ない、楽しくすごした。またオーブンホステリング以外には旅行相談なども随時行ない、好評を博している。

新聞研究部

新聞研究部の主な活動は、我が校内の報道機関として「朝陽時報」の発行を行なうことです。その内容は、十一月に読売新聞奨励賞

を受賞し、あらためてその実力が見直されましたが、発行号数でも青山の「くまんばち」につぐものです。他に戸山戦速報、がり刷りの「週刊新宿」の発行も忘れてはいけません。

戸山戦速報では、あまりの発行の速さに戸山高の女生徒が腰をぬかしたというまことしやかなりわさが出た程です。そして、随時「週刊新宿」を発行し「朝陽」を十分補いました。

本年度はさらに文化祭中最も話題を呼んだ学校新聞には永遠的な問題「検閲」を発表しましたが、その反響の大きさは他のクラブを圧倒しました。夏休みには、OBの親切な指導による新聞作成技術向上及びトランプの習得を目的とした合宿を行いました。

君はクラブ活動の時間を無駄にしないため互いに誘いあい新研に入ろう。

理科

化学部

化学部は、部員、特に一年生がいいため、壊滅寸前です。その理由を考えてみますと、「名前が堅苦しい」と、よく言われますが、それよりも、どんなクラブか、良く知られて

いないことだと思えます。そこで、ある日の化学部の様子を紹介します。

「今日は大勢集まったから出席をとろう」「何をやるのか」「この薬、何につかうんだっけ」「混ぜてみよう」「何にもおきないぜ」「火にかけたら」「煙が出てきた……某君の顔に、横から水がかかる……」「やったな……某君、水さしを持って追う……しばらくの間、逃げまわる音、追いかける音。」

「ところで、この間の数学のテスト……」その間、ひとり、黙々と、フラスコと格闘している男。「どうしてもチョコチョコしか出ないぞ」「何やってんだ」「噴水つくってるのさ」「内と外の圧力が同じじゃ、出るわけないさ。あつためたら」「よし、あつためてやる」……全員そのまわりに集まる。しばらくの静寂……「やった、ついに出来たぞ」化学室中ひびく歓声。――終り――

活動報告

主なものとしては、「液晶」及び「ジアゾ感光紙」。両者とも、資料集めに終始し、実験はあまりうまくいかなかった。

その他、「水蒸気蒸留」・「硫酸銅の生成」及び科学マジック「ファンタム・ライトの製

作」・「ケミカル・ガーデン」。他、オモチャ多数。

天文部

夜空に愛らしく輝き、不朽の旋律を奏でる星々、これらのまばゆいばかりの壮観を見た人なら、その形容をいえない美しさに心を打たれることであろう。

我が天文部は、その美しさに魅了された、柄にも似合わずロマンティックな野郎の集まりである。星空は遠く我々を包み、限りなく夢の世界に誘い込む。そんなとき、この広大無辺な宇宙に対して、自己の無力を感じ、また畏敬の念を抱かずにはいられない。

しかし、ただ星を眺めているだけではなく、あくまでも、我々は天文学の一翼を担うアマチュアとして活動することを目標としているのである。活動内容は、太陽の黒点観測、流星観測が主である。これらの観測にはかなりの伝統があり、技術的にも高いものであり、流星観測においては他校を指導する立場と、誇り高き天文部なのだが、残念にも、新校舎移転、観測室の設置等により、かなりのブランクができその誇りにも多少「埃」が積ったように思われる。

ところで、屋上に出てみるとその片すみに白く塗られた小さな小屋が目につくであろう。これこそ我々天文部の観測室である。移転に伴い、種々の問題を乗り越えて、我々の手によって製作されたものである。移動式のこの小屋は望遠鏡を格納するものである。この望遠鏡も種々の修理がなされ、昭和六年頃の物であるがしっかりと作動してくれる。

このように新しい環境の中で、星に魅せられた野郎が集まり、時を忘れて星を追ひ、共に語り合う。天文部とはこんなところである。星の美しさを知ったなら、すぐに屋上の小屋において。君のレモンのような新鮮な感動を我々と一諸に語り合おう。

芸能科

音楽部

これを読むあなたは、コーラスの楽しさを味わったことがあるだろうか。まだなかったら、どんな機会でもよいから、コーラスを試してみたらどうだろう。

幸い、この新宿高校には三学期に合唱コンクールがある。だから、この学校に在学して

いるかぎり、二回は、その楽しさを味わえるわけである。

しかし、音楽的感覚の豊かなあなたは、それだけではものたりなく感じるだろう。もしそうならば、その時は音楽室にあればよい。そこでは、あなたと同じように感じた人が、声を張りあげてコーラスをしているはずである。

管弦楽部

「すみません。もう満員でお席ありませんけれど……」これは学園祭当日、音楽室での会話です。当日満員にするほどの管弦楽部とはいったい？ 名曲を奏で人々の心を和やかにし、また、すばらしいハーモニーで音楽を堪能する。これらはすべて「ノー。」であります。管弦楽部を一口に言うなら、楽器のいじりたい者の集まり（音痴と技術の持たない者の集合体）です。この部も一時は、四〇五人に減りいよいよ室内管弦楽になり下ってしまったかと思ひしや、突如として二十数人が入部して来ました。（すごい人気。しかしどういふつもりでもないやつばかり……。）

年に春の新生歓迎と学園祭という二大定期演奏会があり、年ごとに盛大になってきて

います。今年の学園祭も盛大にと、六月頃から「アルルの女」など二・三曲始めましたが、結局は八月に行なわれた合宿に、学園祭成功への全生命が賭かっていた様です。この合宿如何によって、本番の甲乙が決まってしまうのであります。幸い今年の学園祭は、文頭の会話の様な結果でした。この部は、部員の意気込み次第でバロックでも映画音楽でも演奏可能になります。

体育科

体操部

六時間目が終わってから体育館へ行くと、隅の方でボロボロの半分壊れた奇妙な器械を相手に猿の親戚みたいな真似をしている一風変わった連中を見ることができるところである。

暑いのにジャンパーまで着こんで着ぶくれているし白い粉にまみれているので、なんとなく薄ぎたなく見える。おまけに掛け声をかけることもない。まったく彼らの練習には他のクラブの練習のようなバツとしたカッコヨサは見られないのである。

だがしかし、その練習の苦しさは当の本人

達にしかわからない。まず、器械体操による疲労は他のスポーツによる全身的な、ある程度の快さの伴う陽性の疲労とは、まったく質が違ふ。それは、きわめて局所的で、筋肉のしびれ、鈍い痛み、硬直、痙れんを伴う陰性のつかれた、息が切れたりするわけではないが熱がある時のように全身がひどくけだるくなり、心臓が胸の中で踊りだし、なまあくびが喉の奥から湧き上ってくる。それはまさに『筋肉中にたまってくる乳酸との戦い』に他ならない。さらに手の平やわきの下に常時加えられる強い刺激のため皮がむけ、血がにじみ出す。その痛みは容赦なく彼らを苦しめるのである。

しかし、それらの苦しみにもまして、体操には他のスポーツにはない喜びがある。それは『完全なことを成す』喜びである。

どんな技でも、それを完全にやることでできるといふ喜びは筆舌につくしがたい。自分のできる技をやっている時には最大の陶酔感を味わえるのである。この喜びは経験したことのない者には、わかりにくいだが、数学の難問が長い時間かかってやっと解けたり、自分の長い間の疑問に解答が得られた時の喜びに似ていないこともない。

それは『最も合理的な運動・最も美しい動きの探求』『完全さを得る』ことを欲するという人間の本能的な欲望を満たし、自己陶醉に没入させてくれる喜びなのである。そしてその欲望を満たしうる、という器械体操のスポーツとしての特殊性が、それをして『芸術とスポーツの接点』と称さしめるのである。

——ここで「体操は見かけより、はるかにやさしいスポーツである。」とか「昨年度は試合成績は……。」などと野暮なことは書くまい。とにかく、ために体操部へ入部して鉄棒にしろ吊輪にしろ、なにか技が一つでも、できるようになるまでガンバッてみたまえ、君はたちまちにして体操の魅力にとりつかれてしまいうだろう。

軟式庭球部

軟式庭球部というものはたいていの中学校にあるので、ほとんどの人は知っていると思う。そして、あれなら俺にだって、私にだってできると思った人も多いと思う。事実その通りなのだ。誰でもが簡単にすることができるのが軟式テニスなのだ。

・テニスは女のするもので、男のするもので

はないと考えている人もいるだろう。しかしそれはまちがいである。テニスは、それほどの体力を必要とせず、すばやく動く頭を必要とするものである。いってみれば、頭脳と頭の勝負なのだ。だから、頭のよさそうな君こそテニスの素質があり、やればすぐ上手になるのだ。

現在、練習日は一週間に三回ある。そしてコートは第二グラウンドに二面ある。練習内容は、別に心配することはない。テニスの練習は、家に帰ってからやる勉強の前の運動みたいなものなのだ。

今年の我が軟式庭球部の活動が盛んになるかどうかは、君達一年生諸君にかかっているのだ。

それではここに、昭和四十五年度の主な活動を記しておこう。

関東大会出場

戸山対抗戦 勝利

富士見高原において合宿

城南新進大会 ベスト8

都新進団体選手権 7位

その他いろいろな試合に好成績を上げている。

経験者は必ずはいりたまえ

初心者も大いに歓迎、大挙入部を期待す！

硬式庭球部

去年は、個人的にはあまり振るわなかったが、団体で都立対抗戦準優勝という偉業をなしとげた。今年は絶対に都立対抗戦優勝と都大会団体戦でベスト4に食いこみ、また、個人でも関東大会出場者を出す所存である。では、四十五年度成績を……

△都大会団体戦（男子）

一回戦 新宿310独協

二回戦 〃〇〇三成蹊（優勝校）

△グリーン・ジュニア・トーナメント

男子複 五回戦出場（丹羽、小林）

△都立対抗戦（硬庭部創設以来初）

シードである我校は、対井草戦を皮切りに決勝戦までまっしぐら……

準決勝 新宿311小山台

決勝 新宿015石神井（女子三回戦）

△都大会新人戦

男子単 五回戦出場（角田）

同 複 五回戦出場（丹羽、小林）

四回戦出場（宮川、井本）

女子単 四回戦出場（赤平、関根）

同 複 四回戦出場（伊藤、関根）

（杉山、田中）

△川崎ジュニア・トーナメント

男子単 五回戦出場（井本）

四回戦出場（小林）

△一年対抗戦成績

新宿1213九段 新宿616石神井

新宿411小山台 新宿1312武工大付

試合はこれ以外にもたくさんあり、年間を通して多忙である。それゆえに練習はきつい。しかし、我々は、かがやかしい伝統を受けつぐために黙々と練習に励んでいる。

卓球部

球誌のニッタクニュースにも紹介された。その他のにも各大会では、なかなかの成績をあげている。

○主な成績

戸山戦 新宿1318戸山（513）女子

関東大会予選 新宿013堀越 三回戦

インター杯予選 新宿114京北 四回戦

対校選 新宿410桜町

〃 新宿510深沢（一年のみ）

〃 新宿312駒場（一年のみ）

第一回校内月例会大会 決勝

古谷211柿原

第二回校内月例会大会 決勝

古谷211柿原

現在一年生がクラブの中心になっているが、先輩を見習い楽しくかつ実力のあるクラブにしようと努力するつもりである。卓球部に栄光あれ！

バスケット部

我々バスケット部は、新チームを結成して、

山岳部

ネエ、君は山に登ったことがあるかい。キャンプをしたことは？何ない？可哀相に。頂上からの素晴らしい眺めも、キャンプの夜の星空の美しさも知らないなんて。自分の足で頂上を極めた喜び、そしてそれをわかちあえる友がいる幸せ。それを味わってみたいとは思わないかい。

苦しい登りの後の小休止。吹く風は心地よく、流れる水は冷たく清らか。空は群青色をしているんだ。聞えるのは川のせせらぎの音と小鳥の声だけ。草のにおいの何とかぐわしいことか。君もこんな経験をして見たいなら山岳部に入りたまえ。そりゃあ他のクラブみたいに都で何位だとか、対抗戦で大勝したなんてことは言えない。だけど僕達のグラウンドは四角い、仕切られた空間じゃないんだ。そして相手はでっかい自然なんだ。登山というスポーツにしかない素晴らしさじゃないか。

もちろん楽しいことばかりじゃないさ。急登につぐ急登。二十キロを越すザックの重さ。登っている間は足元ばかりを見つめているんだ。時々何だっってこんな重たいものを頂上までかつぎあげなきゃならないんだってばかば

国体予選を目標に夏休みの練習に入りました。合宿では、さしてチーム力は向上しませんでした。したが、単独合宿だったせいもあってか、チームワークは目立って向上しました。その後の練習では、着実にチーム力をつけていきました。しかし、バスケットではその名も高き我校（いいすぎ）が、無名の芝工大付工に延長の末に、一回戦で惜敗しました。

練習は体育館で、週五日（朝二日・放課後三日）基礎的なものから高度なものまで、いろいろとやっています。どこに魅せられたのか、ひたすらバスケットをしている我々も、来年こそはと心に誓って、今日も体育館を走り回っている。

関東大会予選（三回戦）

新宿67 28135 78武蔵

インターハイ都予選（三回戦）

新宿72 32143 94京北

国体予選（一回戦）

新宿62 31130 68芝工大付工

新人戦（一回戦）

新宿51 28144 64豊南

ここで話は変わりますが、国体予選の前の旧チームの成績はというと、戸山戦では楽に戸山を破り、関東大会予選、インターハイ都予選の両公式戦では、都のベスト4と互角に戦える程の実力（？）が有りました。そういうわけで、先輩はこの新チームの成績を知ると、大変がっかりしてしまいました。しかし、我々はまだこれからである。先輩・我校の生徒のみなさん、来年のバスケット部を期待してください。

かしくなることだってある。でもそんな時は

の涙をのんだ。

(3) 対早実 019

ど頂上に着いた時の気分はバグンさ。言葉

支部戦での9回2死から久員の放った2ラ
ンホームランはまだ記憶に新しい。

硬式野球部

では本当に言い表わせないんだ。そして山を
下る時の何とも言えぬ充実感。ひとつの大き
な仕事を為し遂げたという実感がこみあがて
きて足取りも軽くなる。行く手に目指すテン
ト地が見えた時のほっとした気持ち。どんな
スポーツにこんな喜びがあるだろう。

登山こそ最も崇高なスポーツだと僕は信じ
て疑わない。登山の喜びを君達にも教えてあ
げたいんだ。山へ登る目的なんかいらない。
一諸に山へ行こうじゃないか。

軟式野球部

軟野というクラブは、誰にでも出来て、か
つ楽しめるクラブなのである。

しかし、それだからといって遊んでいるク
ラブと間違えられては困る。楽しめるクラブ
であるとはいっても、やるからには勝つ

の涙をのんだ。
支部戦での9回2死から久員の放った2ラ
ンホームランはまだ記憶に新しい。

※対戦成績

その為に夏の強い日射の中で、秋の冷たい雨
の中で、暗くなってから、そして夏の軽井
沢での合宿などによって、肌と肌をぶつけて
練習を積んできた、その結果、支部大会、新
人戦とブロック決勝にまで勝ち進んだ。しか
し、ここでは2回とも強豪早実と当たり無念

の涙をのんだ。
支部戦での9回2死から久員の放った2ラ
ンホームランはまだ記憶に新しい。

◎部員 一年生四人・二年生九人の小規模で
あるがまとまっているクラブ。
◎チーム特徴 一・二年生全員がなかなか
雰囲気、かつ引きしまった態度であらゆる
面にアタックしている。これがチームワーク
が良い唯一の原因であろう！
◎顧問 大橋先生(英語科)・福島先生(化
学科)
◎マネージャー 現在0人(ただいま募集中)
◎OB 現中日ドラゴンズ井出先輩・東大野
球部国本先輩。その他大学生の優しく理解
のある先輩ばかり。(これは本当のおはなし)
◎夏季合宿 千葉県銚子市(四泊五日)
◎練習内容及び練習方法
ジョッキンク→準備体操・柔軟→キャッチ
ボール→トスバッティング→フリーバッティ
ング・バント練習→ポジション毎のノック→
ベースランニング・ダッシュ→整理体操→ミ
ーティング(いつもこの通りとは限らない)
試合打順で進んでゆくフリーは硬球特有の
痛快な音を響かせ飛んでゆく。時間的制限と
グラウンド状態etcから思存分納得の行くまで

出来ないのが現状。この制約を補う為に毎週
水曜日に矢野口九段高校グラウンドで練習を行
なっている。学校で十分出来ない試合形式ノ
ックやベースランニング・フリーなどを主に
行なう。広いグラウンドで何の障害もなく思存
存分練習出来るので部員全員のびのびと自
分の短所を修正し長所をのびのびと努力して
いるのである。

◎試合結果 通算対戦成績九勝二敗一引分け

△練習試合

新宿1510明法
新宿1517烏山工 新宿210実践商業
新宿0111法政一 新宿613都立城北
新宿1715都立西 新宿914東京実業
新宿313多摩工 新宿1012武蔵工付
新宿312国学院久我山(シード校)
△全国高等学校選手権新人大会東京都予選
第二回戦 新宿514明大中野
第三回戦 新宿015都立立川

柔道部

柔道といえば、いまやアメリカそしてヨー
ロッパまで普及し、世界のスポーツへと発展
してきた。きみたちも世界のスポーツ柔道を
やろうではないか。

ところで我柔道部は、旧体育館とりこわし

のために道場が旧校舎内へ移るなどゴタゴタ
していたが、各都立校との対校試合において
は圧倒的な強さを示し、対私立校戦にも、全
くひけをとらない好試合を演じている。十一
月九日に行なわれた第三支部予選大会では、
一年は惜しくも私立城北高校に敗れ、都大会
出場はならなかったが、二年は都大会へ出場
となり、善戦したが、第一回戦で敗退した。
しかしその実力は高く評価された。

主な戦歴()内は、新宿高校の成績

◎六月十三日(土) 戸山高校定期戦
(対人戦) 十勝五敗〇分
(勝ち抜き戦) 七勝二敗八分
◎九月二十六日(土) 対駒場高校戦
(対人戦) 七勝一敗三分
(勝ち抜き戦) 七勝六敗五分
◎十月四日(日) 対小石川工業高校戦
(対人戦) 六勝三敗六分
(勝ち抜き戦) 十勝〇敗〇分
◎十月十一日(日) 対千歳高校戦
(対人戦) 七勝三敗五分
(勝ち抜き戦) 九勝十敗五分
◎十月十七日(土) 対青山高校戦
(対人戦) 六勝〇敗一分
(勝ち抜き戦) 十一勝二敗四分

バトミントン部

我々は、新宿高校柔道部の伝統を守り続け、
さらに成長しようとしている。しかし柔道部
にも問題がないわけでもない。それは現在の
一年に重量級の超大型新人がいないことであ
る。今年は超大型新人の入部を期待している。
小がらな人でもスピードがあれば平気である。
だからどんどん入部するように。

「バトミントン？ハハハハ」西洋羽根つき
か。」君達は、バトミントンに対して、この
程度にしか認識していないであろう。しかし
ながら、日本におけるバトミントン競技は、
女子の世界二連覇など、近年世界のトップレ
ベルの位置を占めるに至ったのである。実際
は、君達が気軽にリクリエーションとして行
なっているバトミントンとは、ラケットも、
シャトル(人々はこれを「羽根」という)も、
打ち方もちがうものだ。

バトミントンは、ほかの競技とはちがう
「シャトル」(羽根)という球とはまったく
ちがった動きをするもので技を競うところに
おもしろさがあり、これは、やったことのある
者でなければわからない。また、バトミン
トンは、五体さえ満足にそろっていれば、背

の高さなどは、ほとんど関係なく、だれでもできるのである。

今や、日本バトミントン界は一大飛躍の時期なのである。この時期に、新宿高校バトミントン部に入り、OBや先輩達の名コーチを受け、一躍名を上げようではないか。バトミントンは「女テニス」などと言われながらも女子部員が少なくない。だから女子部員大歓迎！男子も勿論歓迎！

ところで45年度の戦績であるが、戸山戦は旺勝、四十六年一月の東京都新人戦では、ほとんどの方が一回戦、二回戦は勝ち進み、一年の山下博史が優勝し、新宿高校バトミントン部の名は、東京都高校バトミントン界に響きわたったのである。

紳士淑女としての良識を土台として運営するスポーツ・バトミントン部へどうぞ。

剣道部

関東大会予選（四回戦）

新宿014中央大附属（三位）

インターハイ予選（四回戦）

新宿114世田谷（三位）

国体予選（四回戦）

新宿213城北（三位）

支部大会 一年 三位
六校リーグ 初優勝

以上が本年度のおもだった大会の戦績である。現在、剣道部は一つの壁に直面しており、その打開が課せられている。私立一流校との練習量、技術面での差は、剣道の歴史が古いだけに、歴然としている。その差をいかに打破するか、その為に、練習方法の改善、部内の雰囲気、練習態度の改革が叫ばれた。その結果、練習方法は、私立一流校のそれを導入し、又、大学の練習にも参加するようになり、その他の面でも、完全とはいかないが、ある程度まで、引き締まってきた。その成果が六校リーグでの初優勝を生んだと言えよう。剣道部はこれからも、各方面への改善を続け、現在の壁を打破し、できるだけ早くAクラス入りを果たしたいと思う。現在三段者二名、二段十八名、初段約二十名になっている。

二部

落語研究会

エー。オチ研でございます。昔から動物と落語を好きな人に悪人はいないなんて、言われておりますが、我がオチ研に至ってはその典型で部員全員、私（わたくし）をはじめとして、品行方正ニシテ学業優秀ナリ。まさにこれでありませう。ゆえに、教師に呼び出されたとか授業をサボったとか、女の子にいたずらしたなんて話は一度も聞いたことはありません。

まあウソはこのくらいにしまして、一頃の寄席ブーム（落語・漫才・漫談など）といわれるものも去りましたが、一部の本当の落語ファンの間では依然と根強く残っております。そして、寄席からホール落語という形をとるようになり、落語を本当に好きな人のために本物の落語を見せてくれるところが多くなって非常にうれしい次第であります。しかし、一部にはタレント落語屋がテレビ・ラジオなどに顔を出し、縮めた適当な落語や愚劣なしゃれを飛ばして客を笑わせようとしている現

在、落語が誤解され、また、我がオチ研もその被害を受けることが多少あります。

それならば我々が真に求めるものは何か、それは、かつての日本人の人情、生活に落語を通してふれるということです。また、オチ研の公演に集まった皆さんに少しでも深く落語を味わってもらいたいという気持です。落語の素晴らしさを知ってもらいたいのです。しかし、このような理屈は別として、活動を行なう上で優先しているものは、とにかく落語が好きだということです。

一年に約4回の公演を我々の研究発表ということにし、中でも学園祭は全部員が出演する、我々がいちばん力を入れている公演です。しかし、公演ばかりやっているのではなく、古典落語の性格上、昔の風俗を知らなくてはできないので、その方面の研究も大切です。これからも、研究をより充実したものにしたいと思います。

同好会

文芸同好会

彼は彼女を強く抱きしめその髪に口づけを

した。なんの語らいもなく、そこにどのくらいたたずんでいたのか彼は知らなかった。小川のせせらぎは果てしなく続きふくろうは鳴きつづけ、月は静かに昇って白々と冴えわたっていった。二人のまわりや頭上の花はみずみずしい美しさのままに一きわ輝いていた。二人の唇はお互いを求め合って言葉もなかった。語らいを始めたならその瞬間にすべてはかない夢となるであろう！木の葉のざわめきとかすかなささやきのほかに春は何一つ語らなかつた。咲く花や若葉の中に、小川の流れて、そしてその楽しい、絶え間なき探究の中に春は言葉以上のものを豊かに持っている……ときおり春は生氣あふれ神秘の人のように立ち上がって恋人たちのところに行き彼らを両腕で抱いて、その魅力にみちた魔法の指先を恋人たちに与える。すると、唇を合わせて立っている恋人たちはただ口づけのほかの何もかも忘れ果ててしまふのだ。彼女の胸のときめきを自分の胸に受け、唇のふるえをその唇に感じて彼はただうっとり何と感じなかつた！運命が彼の両腕に彼女を抱かせたのなら愛はたわむれではあり得まい！だが今はただ情熱だけが強く燃え上がるばかりで、彼はせつなく吐息した。「ああ、君は何故文芸部

に入ったの？」彼女は心を傷つけられ、驚いて腫を上げた。「まあ、あなたがそうおっしゃいましたからですわ。」「そんなに君僕のことを愛して……」「そこでおやめになってくださいまし。わたし何ていったらいいの……」「彼は再び彼女の額に口づけをした。林檎の花びらがそとまって彼の髪の上にのった。二人とも酔っていたにちがいない。林檎の香りと春の宵とろけるような口づけに……だから私はこそそこそと家へ逃げかえってきた。「俺みたくにモテない男は文芸部をやめよう！」あんなにみせつけられて、ちくしょうおまえは入れるからそんな顔して呼んでるんだろ、ああうらめしい。」と涙を流した日もあった。

数学研究同好会

数研という名を聞くと、何やら堅苦しい雰囲気を感じて人が多いようだが、僕らにとっては非常に心外なことである。数学の楽しさ・面白さを知り、新しい数学を研究することを活動の基本としている。現代社会に必要な、斬新な考え方のもとを作る数学に少しでも興味を持つ人は、ぜひ数研にはいることを勧める。

では、今年度の活動を振り返ってみる。

四月早々に、前々からの計画に基づき、機関紙「アレフ」6号を発行した。それから九月までは、従来通りの講義形式と個人研究という二本立ての活動を行なった。また、八月にはOBの世話で合宿が行なわれ、短期間に充実したものを得た。二学期にはいつて、前半は学園祭のために力を注いだ。「逐次近似法」「記号論理」の研究発表と、懸賞付きパズルを行なったが、殊に「記号論理」は、模造紙八十枚という超大力作であった。そして、この研究発表を中心に「アレフ」7号を発行した。学園祭後は、一年に活動の中心が移ってきて、「微分」その他の研究を行なった。活動日の土曜日には、OBが時おり姿を見せ、指導をし、助言を与えてくれた。

鐵道研究同好会

毎年冬になると駅の掲示板に『当駅のピークは○時○分から○時○分までです。どうか時差通勤を』という協力を求めているお知らせがでるだろう。冬に限らず、年中ラッシュ時には『酷電』といわれるくらい混雑がはげしいが、特に冬は着膨れによって一人あたりの容積が増えるからよいギューギューに感じるのだ。感じるだけでなく、二分十五秒の間隔でホームに進入する電車のダイヤを保てなく、〇電鉄やK電鉄などひどい遅れを出すこととなる。

さて、鉄道研究同好会は今年この『通勤輸送』という私たちに身近な問題に焦点をあててみた。運賃は上げたが、ぜんぜん改善されていないように見える今の現状を客観的にながめ、どのようにしたらある程度まで改善できるのか。これからの通勤輸送はどうあるべきか。等、正しい理解を得る事ができるような広い視野から深く探っている。鉄道のクラブというとすぐHOGージの模型運転を想像するらしいが、やはりもっと鉄道という輸送機関の本質をさぐってみるべきだと考えている。SLブームにしても、国鉄財政にしても、

輕音樂同好會

文化祭のあの強烈なニュー・ロックの感触を覚えていたのだろうか。アンブから出てくるその音は現代の若者の心の声であつた。そう、今は失われようとしている若者の心があるのだ。軽音と言われる音楽の中には。

特に、我が新宿高校に唯一つある軽音楽同好会は創立から一年弱の、若者の心のように希望に燃えるクラブなのだ。

しかし、現実には、軽音は沈退ムードの中

に陥っている。文化祭のあの姿は今は影すら見えない。微かに本当に音楽の好きな連中が数人集まり、ギターを弾いているばかりだ。軽音の練習日には静莫としたものが流れている。音楽室は冬の木枯が通りぬけている。

だが、その沈退ムードからの脱出は、今、行なわれようとしている。本当の音楽を創造しようとする格好いい奴らが、軽音に集結し始めたのだ。今、軽音は冬の灰色の雲の切間から見える春を待つ若い芽となったのだ。確実な一歩を力強く歩み出そうとしている。今こそ若い力強い行進は始まろうとしているのだ。音楽の中に青春を見つけた君！独りぼっちで淋しい君！サッ、入ろうではないか、真の若者の心を、真の若者の明日を、軽音で創り出そうではないか。本当の自由を、本当の生を、今こそ感じようではないか。

S · F 同好会

「このクラブ紹介を読んで下さる全校生徒諸君へ、特に新人生諸君へ」

S・F同好会を紹介するにあたりまだその経歴の非常に新しい事を書いておこう。このS・F同好会は一昨年、文芸同好会に所属する一研究会として発足し、数名のS・Fがメ

シより好きな先輩達により少しづつ発展をしていった。そして僕達の代に受けついでからたちまち研究会の地位を脱し一同好会としてより大きな進歩を遂げるに至った。ただ年数（歴史）の面から見れば発足以来2年にも満たない弱輩だがその内容は充実し現在部員数十数名を数える程になり、ますます成長の一途をたどっている。校内活動のみならず校外活動も非常に盛んで単に新宿高校というワクにとらわれず他校の同種のクラブとも進んで自由な交際をするように心がけている。その一例として昨年の『全国高校S・F連盟』結束が挙げられるだろう。同連盟はまだ発足したばかりで現在それほど活動をしていないとはいえ、将来は、年に一、二回の同人誌発行、他校との評論の交換など一層の発展をめざしている。

このように歴史は浅いとはいえS・F同好会はめざましい速度で成長しており新興の同好会の中では出世一番頭といってもさしつかえない程である。

今まで一応諸君がS・Fというものをすでに知っているものとして話してきたが、ここで念をおす意味でこの同好会の性質を述べておこう。S・Fとはサイエンス・フィクション

因著将棋同好会「将棋」

ンの略称で君達も一度はこの種の小説を読んだことと思うが当同好会ではその創作・評論などを手がけ、原則として月に一度の同人誌発行をめざしている。部員はみなS・F好きの健全な精神の持ち主で、いわゆるS・Fにつきものの偏見をこの世の中から一掃しようと熱心な努力を重ねている。

さあ、君達もS・F同好会に入会して変化と希望に満ちた高校生活をおくろうではないか！！

我が将棋同好会は火木土を活動日と称して毎日遊んでいる。一部では「老人の娯楽」という声もあり、単なる娯楽として扱ひ傾向も見えはじめてゐる。元來、同好会として発足したのだから、研究し、練習し、上達にいそしむのが常だが、我が同好会は、クラブ修得の爲に加入しているものやうで、只灰色の道を一途に進んでいる。

思えば、発足以来、全国一の桐棚校に惜敗後、努力に努力をつんで、戸山戦では五対〇の圧倒勝ち、七月には桐棚校に雪辱を果たし、『全国一』をめざして全国高校選手権に出場。しかし惜しくも5回戦で都立立川校に破れ、

ベ
よ
う
。

数研は、ことし創立七周年を迎え、ますます活発に活動している、というのなら文句はないのだが、実は、ちょっと深刻な危機に瀕しているのである。何十人も会員がいる、などということを望むのは無理だが、せめて、二十人は欲しいところである。しかし、今はその半分がやっというところ。ヤル気はあっても、人手がないというのが泣き所である。

また新幹線網にしてもマスコミに取り上げられてゐるが本場に私たちはそれらのことに正しい理解をもつて接することができているだろうか。社会機構の中で鉄道の持つてゐる役割りは余りにも多く責任は重い。そういうことをこの同好会は取り上げていきたいと思う。こう書くとは何かいたつて堅苦しい会のように見えるが、実際は大変陽気で楽しい連中で構成されてゐるからすぐに線路から脱線、その後は？ 急告！文化部の宿命ともいおうか、部員が非常に少なくて実際の活動も十分でないでこまつてゐる。鉄道に興味のあるかた、旅が好きな人はどんどん入部してほしい。

全国大会出場を果たせなかった。個人戦では田中君が全国九位という輝かしい成績を残したが、学園祭での対桐棚校戦の取りやめなどで調子がおかしくなってきた。現在部員数十人、内有段者六人という外面的には申し分ないが、実際は二年生数人が部屋の隅でやりパチンコする者や麻雀する者で、来年にはつぶれる傾向が強いようだ。これからは長期一年計画とでも称して立て直しにふみ切るが、依然、麻雀同様に扱うのが世の中であり、将棋愛好家が先生方に少ないこともあって、前途多難である。四月からは記念会館が使えるということだが、同好会という事で一銭もでないこと、部員の回収の悪さがたたり、タタミの上でラワンの板、五十円の駒でやる事を思えば誰もがほざくだらうよ。『カッコワリ』と。来年の一年に期待するのをみて、戸山戦、全日本高校選手権を思うと憂うつになる。将棋に興味があり、立て直しに協力する方の入会を望む。全く悲観的だが、これが僕

「囲 碁」

「ねえねえ、碁ってさ、白い石と黒い石を置いてやるのよね。」「あなた知ってるの？」「とんでもない。ちょっと見たことがあるだけよ。あれ、ずっと見ていたら、きっと分裂症になっちゃいわ」ある男は「何？碁？ああ陣取りか」多くの人が決まりきった言葉でもあるかのようにこう言うが、碁はパチンコなどの遊びとは違い、頭脳と頭脳の戦いなのである。碁の面白さが、こういう人達のように、先入観によって邪魔されているのが残念である。みんなの持っている先入感を今、きれいさっぱり捨てて、本当の碁、その面白さを知ってほしい。

さて、我が同好会、活動日は火、木、土の週三日制。たいていの日は、顧問の豊原先生が熱心に指導して下さるので、充実した活動が続いている。学園祭に行なうはずだった戸山との招待試合が中止になって、また他校との交流はないが、本校の先生方との対抗試合は何度かある。また碁会所などでの校外活動も楽しく行なった。ところで、囲碁同好会に緊急の問題があることを御存知だろうか。それは一年生がたった一人しかいないことで、しかも全部員あわ

せて五人。これは我が同好会が、四十五年度クラブ紹介のあとに結成されたことに所以する。しかし、もうすぐ四月だ。この機会に、新入生はもちろんのこと、運動部、文化部に所属している人も、入部してくれることを期待している。

委員会報告

昭和四十五年度生徒会総務				○その他諸機関			
会長		前期	ロバート	生徒代表会議議長		前期	岩下 明
			スキナ			後期	近 達也
			2 B				2 A
副会長		後期	花井 達也	HR連絡会議議長		前期	森 隆之
		前期	和田 哲郎			後期	若林 誠
			2 D				2 D
書記長		同	志 萱 祥一	放送委員長		前期	太田陽一郎
		後期	石 東 嘉和			後期	池山 良次
			2 A				1 E
		同	大村 鉄夫	新聞委員長		二期	秋山 茂樹
		前期	田中 方人			前期	佐藤 裕志
			2 D	選挙管理委員長		前期	太田 正行
		後期	空位			後期	太田 正行
			2 H				3 A
クラブ委員長		二期	神崎 正巳	学園祭対策委員長		前期	神田 寿子
		前期	加藤 利治			前期	太田 正行
			2 F	戸山戦対策委員長		前期	三品 知之
クラブ副委員長		後期	上野 博			後期	三品 知之
			1 C	編集委員長		二期	神田 寿子
生活委員長		二期	小沢 慶晃				2 F
		前期	松永 雄司	昼夜交渉委員長			2 F
			3 F	合唱コンクール対策委員長		後期	仁熊 英二
文化委員長		後期	博松 茂喜				2 C
			2 B				
保健整備委員長		二期	佐々木 正一				
		前期	池ノ谷 真司				
体育委員長		後期	松井 俊治				
			2 F				
図書委員長		前期	木田 誠一郎				
			2 E				
		後期	椎崎 洋				
			2 F				

放送委員会

当委員会のおもな仕事は、各行事、つまり入学式、卒業式、生徒大会、運動会、水泳大会、学園祭、朝礼、業間体操、火事の時、などのマイクその他の準備、昼のDJ、連絡、下校放送等々。人の集まるところでかならずその活躍ぶりを見ることが出来る。

特殊委員会の一つで、総務二名と放送研究部五名の計七名で構成される。しかし総務の二名は、何かと忙しいらしく、放送室（当委員会だけは、仕事柄、委員会室をもつ）にはあまりいらっしやらない。いくら放研として、5名でこれだけの仕事が出来るはずもなく、結局、放研総手で、この仕事を消化してくれている。善意からのみ、委員会の仕事をクラブを犠牲にまでして行なってくれる放送研究部に対し、委員長として深く感謝したい。いろいろ多忙であった昨年度に比べると今年度は、順調にスタートした。例年になく一年生がたくさん入部したので——委員会「クラブなのだ——だいぶ余裕をもって仕事ができ、今年度もまた大した失敗もなく無事に任務を終えられそうだ。

昼のDJはラジオなどを参考にいろいろ研

究しているのだが、なんせ、プロの放送局とちがい大きなレコード室があるわけでなし、曲が尽きることもしばしばあった。そこで、『みなさん』の放送時に流して欲しい曲がありましたら、どうぞ放送室までお持ち下さい。レコード、テープどちらでも結構です。責任をもって扱いますのでご安心下さい。』

当委員会へ入るには、総務になるよりも、放送研究部へ入部する方が手軽であり、DJの基礎となるアナウンス練習から学べる。また機械技術が好きな人も同じ。なお、放送研究部では放送劇も作っている。

図書委員会

今年度の図書委員会の活動は、一応大きな障害もなく、順調に行なわれたかのようにみえる。また、委員会としてもよくまとまっていたようだ。だが、その活動の内容に目を転じてみると、そこに何かが欠けていたように思える。いったい何が欠けていたのだろう。委員会の活動に対する、生徒の非協力ではないだろうか。

たとえば、読書会。委員会のほうで、いくら計画を立て、宣伝してもいざ会を開いてみれば、図書委員と二、三名の一般生徒のため

の読書会に終わってしまう。委員会がいくらがんばっても、それではなんのために活動しているのかわからない。

高校生である私たちにとって、学校内では、たいせつな場所のはずの図書館。その図書館をみんなが、よりよく利用できるように活動しているのが、図書委員会なのだから、その活動は生徒と密着したものになるのが当然のはずである。当然であるはずのことが、行なわれていない現在、少しでもそれをなおそうと努力すべきではないか。そのためにも、もっと一般生徒の協力がほしい。来年度こそは、生徒と密着した活動ができる図書委員会になりたいと思う。

全定交流委員会

「全日制」「定時制」
私たち新宿高校に、このふたつがあるのを知ってる？

「昼夜交流ノート」
これなるものが つりさげられていたのを知ってる？

定時制の人ってどんな人だと思ってる？

何故 私たちが帰るころ

あなたたちは ワッサワッサと
登校してくるの

星が出ると 帰る私たち

でも あなたは 真暗になると
学校の門をくぐる

昨年の11月3日、私は定時制の学園祭を見にきました。それはもう夜でしたけれど、小松崎さんという人と少し知り合っていたので彼女が案内してくれました。体育館に行ってみると、そこでは、人間が躍動していました。ゴーゴーに合わせて踊る、踊る、真黒にして、両方から奇抜な色のライトを当てて

みんな へただ
でも 踊る
みんな 楽しそうだ
虚栄がない

そう、痛切に思いました。全日制の生徒には、ゴーゴーダンスはきっとできないだろう、恥ずかしくて。

そして、次にまのあたりに見たもの、それは定時制の男子と女子のつきあいのほがらかさでした。定時制の生徒自身も、底ぬけに親

しみやすく謙虚でした。私はその定時制の社会の雰囲気陶醉しました。それまで、全日制の社会に、その人間関係に、男女関係に欲求不満を感じていた私ですから

高校生活の謳歌とは なんだ
私が高校生になれたのは 私が努力したからではないのです
高校生の謳歌とはなんだ

ずいぶん、私的なことを言ったのを許して下さい。でも、これが全日制のみんなにもこの人間関係を感じてもらおうと思い、みんなが気楽にやれるフォークダンス会を思いついた、もとの気持ちなんですから。

一昨年には、渉外委員会なるものがあって「昼夜交流ノート」というものをやっていたし、その前も聞くところによると、全定交流というのを結構やっていたようです。しかし、昨年の前期にはその渉外委員会もなくなったので、定時制のことは、ひとすじもはいつてこなくなった次第です。

それで、11月に「全定交流委員会」を生徒代表会議にかけて登場させました。しかし、委員は有志だったので、思うようにならず、

これからは各クラスごとに委員を選出してもいい、もっと着実に交流会を推し進めてゆこうと思っています。

私が思うには、交流がどうのこうのと論じる前に「まず、定時制の人に接してみよう」ということが大切だと思うのです。というのも、私が思いついたのも、定時制の社会に実際に触れてみてからのことなんですから。

まず、会ってみよう。話してみよう。

今、学校内での全日制と定時制間で問題になっていることは、なんといっても「掃除」とそれと「更衣室の使用」です。これらもこれから親睦が深まるにつれて、解決してゆきましよう。今は、犬と猿みたいに、あいさつもしない異様な空気ですよね。

それはそうと、交流会の性質も方法も、初め私が思っていたことを離れていろいろな方向に発展しています。そのひとつに

フォークダンスのように気楽なものもよいが、やはり、話し合い会が内容がある。というのは、定時制の人を知っても、その知るところにどれだけの意味があるのか。それは何にも自分のためになっていない。お互いにその立場を認め合っている問題について話し合いをしようで

はないか。

という意見も出ています。

だから、これからの委員会は、各クラスからの選出委員によってつくり、交流会だけでなく、継続的に交流を推しはかってゆくようなものにするとういと思います。

その委員会の仕事

○交流会の計画と実行

(定期的なものも含む)

フォークダンス、フォークソング会

クラブ対抗戦 スポーツ大会

クラス別交流 討論会

○掃除、更衣室の問題の解決

○その他、新聞などによる交流の推進等です。

学園祭対策特別委員会

「涼しい!!」

真夏ってというのは、どんな時か知ってる？私は去年の真夏の日々を、あの学対本部の椅子の上で、毎日毎日過ごした一人なのです。

新宿高校のタイル張りの学対本部は

実に 風光名美

風通し 良好

夏休みにおいては、特等席だった

その学対本部の大きな机のまわりで、学園祭が行なわれるまでやっていたことを、ここにひろく紹介します。

それは 恋ではなかった

それは学園祭の準備だった

(あたりまえでスイマセン)

仕事はごちゃごちゃした仕事に埋められると、思っていればまちはいいはない。

1. 予算配分の決定(5月頃行なった)

学園祭費にあてられた総務予算、二万六千円を、クラブ、クラス補助費、プログラム、ポスター費、校内装飾費、後夜祭費に分配する。

2. プログラム・ポスターの作製へ

(7/8月頃の仕事)

・黒地に白十字でおなじみ(?)のプログラム・ポスター。この案をだした某氏は「黄金分割だ」といっていました。

・プログラムが 一部出来あがるまでには、

各団体から、参加内容について、二百字程度の原稿を8月初旬出してもらった。(夏休みにはいってしまっ、ああ遅すぎた!!)

また、

プログラムの中の広告は、貧弱なる予算でまともなプログラムを作るのに、一役買います。しかし、この広告あつめ、暑いさなかに電車で走りまわらねばならず、それも、広告を頼みに行く、広告の原稿を取りに行く、広告料をとりに行くと、一回で済む事ではないゆえ、走りまわる疲れも倍加するというものです。

・昨年度は、プログラムに入れる講堂等のスケジュール表が間に合わず、学園祭当日にプログラムを配るといふ醜態になってしまいました。

3. 当日および準備段階の部屋と時間の調整
(7/9月頃の仕事)

・学園祭当日の展示の部屋の割り合と、講堂の演劇、音楽室の合唱、演奏、視聴覚教室の映画のスケジュールを決めました。

・また、9月にはいつから、演劇の舞台練習の時間を調整し分配します。

4. 校内装飾(8/9月当日までの仕事)

こういっても漠然とわからないと思うので、細く述べますと、

・各団体の宣伝の方法について、ビラ・たてかん・たれ幕・ポスターを認め、はげやすい壁の外はどこに張ってもよいこととしました。

・門にアーチを作り、正面に「新宿高校学園祭だよ」とたれ幕をつりました。

・学園祭当日は土足にするということについて難行しましたが、保健委員会からの要請など、床に傷がつくという理由で、結局スリッパを使うことになりました。

・このスリッパは、不足が非常にめだち、来校された方に大変な不愉快を感じさせたことと思います。

・旧校舎の校門の方にいらっしゃる方も多くて、そこは開いていないので、不便を感じたことと思います。

・校内の駐車は認めませんでした。

5. 舞台装置の準備、いす、机の移動の企画

(6月/9月当日までの仕事)

何と言っても大変だったのはこの仕事だったと思います。昨年から新体育館を講堂として使ったのです。それまでは旧校舎の講堂を使っていました。

体育館を講堂とするんですからね!!

まず

・舞台の装置

・照明道具を他校から借りてきました。もとは体育館なのだから、照明器具を取りつけるのも大変な骨折りでした。

・各団体から、展示に必要な机・いすの数を出してもらい、移動の計画を保健委員と共にたてました。

6. 後夜祭運営

・各クラスから後夜祭委員に一名ずつ選んでその人達に後夜祭準備を進めてもらいました。当日は、道化師になってもらいフォークダンスを率先してもらいました。

学対とは

学園祭実行の中枢であり

世話係であります

真夏の汗ばむ毎日

タイル張りの学対本部の椅子の上に
坐っていました。

御宛を見ながら

その上に涌く白いむくむく雲に
さそわれて

運動場の砂のはいつてしまった
お弁当を食べました。

それは恋ではなかった

学園祭の準備だった



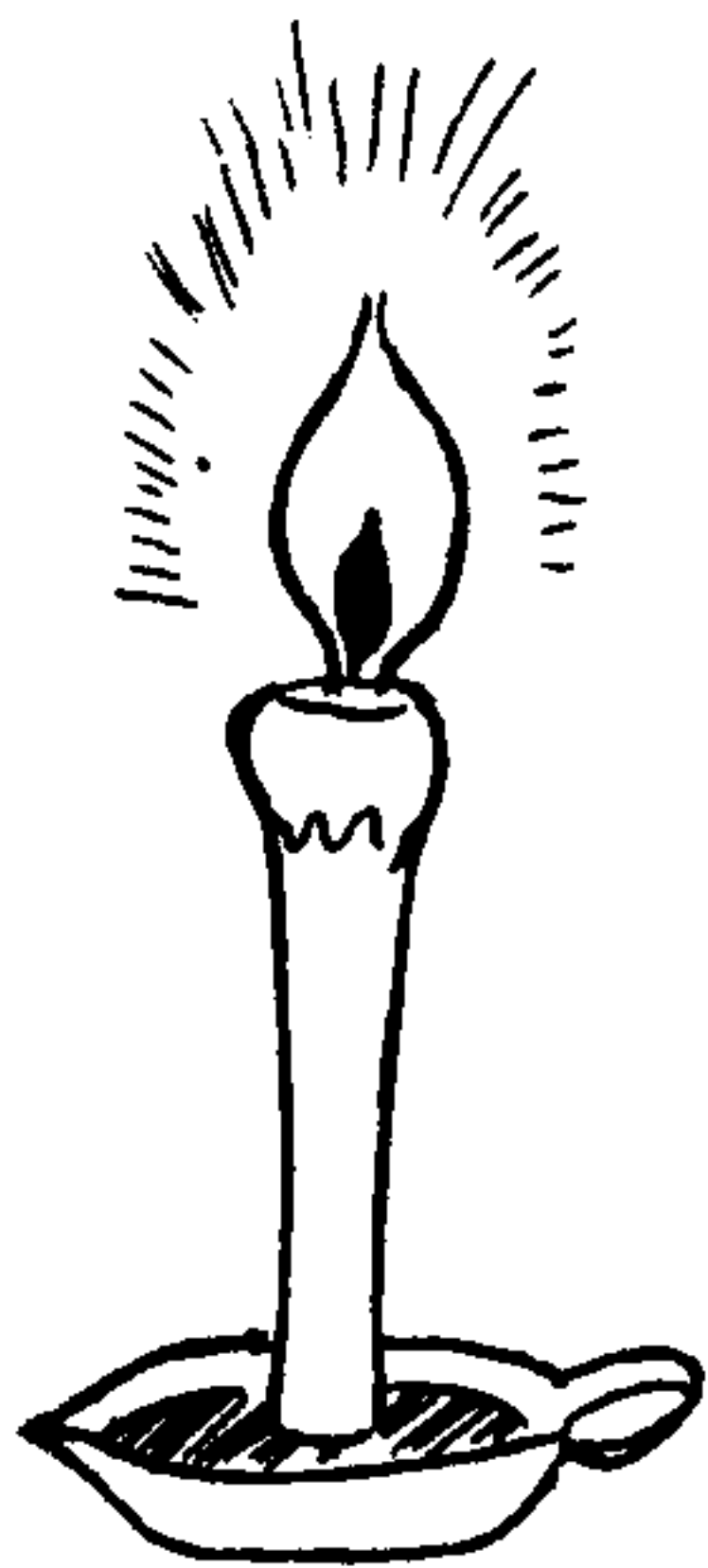
創作

盲 目

花井達也

盲人が一人、町を歩いていた。と、突然、青年が角から飛び出して来てぶつかった。「いてえなあ、じいさん。」青年は叫んだ。しかし老人が杖を手さぐりで探しているのを見ると、盲人だと気がつき、すぐに、「ごめんな、じいさん目が見えないのかい。」てあやまった。じいさんは青年に言った。「いや、私がよけられないばかりにあなたに迷惑をかけちゃって。」青年は赤面した。「そんなこと言われると、こまるよ。じいさん。」

・すこし話しながら公園へと足をむけた。「じいさん、目くらだから不便するだろう。この世界が真暗だなんて、おれ、気の毒な気がするよ。」と青年は言った。すると老人は「そんなことはありませんよ。」と答えた。青年が不思議に思っ、訪ねてみると、老人はつづけた。「世の中は美しいものでかぶせてあるけど、汚ないものですよ。私のように長い間盲人をやっていると、視力のかわりに何か他のものができると。そう第六感ってやつですよ。私は感でしか人を見ることができない。けれど、確実にその人を見抜きますよ。ですから暖かい心をもった人ならすぐ喜ぶし、冷たい人なら悲しむんです。私は盲人でいることをむしろ感謝しているんです。うそなどない・・・要するに世間の間ではうそで通ることで私に



は通用しません。私は幼ない頃、目を病んで四才ごろまでには失明してしまいました。今でも覚えていいるものがあります。なにかわからないほおとした・・・でも暖かい思い出をもっているんです。私はそれで世界で一番幸せだと思っんですよ。」……………少しの間沈黙が続いた。老人はやさしく吐息して、さらに先へつづけた。「私は天の災難で盲人になったことも感謝しているんですよ。」青年はたずねた。「何故、天の災難で盲人になって嬉しいんだい？」老人は笑いながら答えた。「というのは人間はだれも、いざとなれば目をつかわないことはできません。でも、目を開けたいとき、その誘惑は、すごい勢いで人を苦しめるでしょう。また目を一思いに閉じてしまえばいい、という人がいるかもしれませんが、未練があるんです。ですから私は、それをあきらめることができる天災に対して感謝しているんですよ。」青年は、じっと考えこんでいたが、急にいたたまれなくなつて：実は涙が不思議とでてくるので：立ちあがった。そして言った。「じいさん、さようなら。おれ、自分が嫌なっちゃったよ。人をうたがうことしかできない自分がね。」老人は呼びとめた。「ちよっとあなた。あなたはいい人だ。私には、あなたは根がいい人だということがよくわかる。」青年は再び赤面した。そして二人は別れた。数歩行くと青年は老人が、うまく階段をのぼるのをみまもりながら言った。「へっ じいさん、わかったようで、わかってやしない。……おれがいい人だってさ。やっぱり、しょせん、盲目だな。」…かれは満足そうに、歩いていったが、急に走り出し、見えなくなった。老人は、今日はすごく愉快だった。そしてなんとか、つえと感をたよりにかれの家にとどりついた。木の扉をあ

けると、くもの巣があった。老人はそれを以前から知っていて、よけて通った。かれを待っていたのは、かじりかけのパンと、だいぶ毛のぬけた毛布と、ろうそくの光と、真実と永遠の眠りであった。海がきれいだった。真青な海に真紅の陽が沈んでいた。

三年C組 姉川雪信

このうるわしき若きいのちが
突如として流星のように
静寂な境地からおどり出て
半ば天使のごとく
半ば悪魔のごとく
光焰をはなちながら
酷くも
いじらしくもおどり出て
一瞬ひらめき
たちまちにして消えさり
かくて長い幾世紀のあいだ
人の記憶にとどまるとせば

第一章

―生に対して死があるが人間は生しか体験できない。そこに生の迷いがある―
―死ななければ生きられぬ時死を選ぶべきか、又それを他人に強要できるか―

―疑うことを棄てた者は死を恐れてはならない―
―生を維持するは即ち死であり生を向上させるは即ち生である―

第二章

生とは物体でもなければ唯心論者の語る精神でもない。生とは猿にも魚にも昆虫にもアミイバにも通ずる力としての流動的エネルギーである。そしてそれ自体はなんらの型も示さなければ、我々が言う所の精神活動もなし得ない。又神のような極めて人間的な意志に左右されないし、なんらの目的を持つエネルギーでもない。我々は電気や核のエネルギーを知っているが、生命のエネルギーをそれらと同様に考える事をしなかった故、その発見が遅れたのであろう。

生命の個々あるいは人間の個人個人とは、生命エネルギーが作用する上の最低単位であり、その核を以て生命（生命エネルギー）を語るのは愚である。一人の人間の死や誕生は生命エネルギーの活動の一部であり、その全体から見れば余りにも微小なものである。

しかし我々が個の枠からそれを眺むれば、エネルギーが全ての個体に等しく行き渡っているかといえはそうではなく、非常に生命エネルギーの強い者もあれば弱い者もある。量は均一ではないが質は同じことである。我々はまだこのエネルギーを我々に叶った目的で使用する能力を持っていないが、それが存在するということは事実

である。やがて我々はそのエネルギーのなんたるかを知らなくても先づそれを使って生命体を作り出すまでに至るだろうが、これは人間という別な存在が生命を作るのではなく、生命エネルギーが物体に作用して……。

第三章

英二は階段を登って行く途中で浩子にバッタリと会った。窓を背にした彼女の長くて艶のある栗色の髪は、耳の下あたりから小さなうねりを生じて、真白なブラウスの肩まで落ちてゐる。深みのある黒い瞳はいつものように心無しか潤んで、月を写した静かな水面の様に、いくつもの光が、小さく、キラキラと、輝やいてゐる。二人は、二人の横をどこかのあわて者が、ガサツな音を立ててバタバタと騒々しく走り抜けるまで、互いに言葉をかわさなかった。彼女は先づ白い型の良い歯を見せて軽くほほ笑み、大きな目で英二の顔を見上げ、それからすぐに又、視線を英二の胸のあたりまで落として言った。ぽつりと。「きょうもクラブがあるの？」彼女の顔を見ると先程のなんとも美しい瞳は、むしろ長いまつ毛に押し隠されてしまつてよく見えない。その目の表情に彼女の中にある一抹の愁いがけなげに表われていて限りなく愛らしく感じられるのである。

英二は思った。もし僕が彼女の心の扉を押し開いて内へ入れば、眩しいばかりの光に満ち、しっとりとした潤いのある数知れぬ花の樂園があるのに違いない。ただ明るい希望の中に存在しついつも彼を困惑させたのは、樂園に咲いてゐるはずの花の色である。夢の様な話である。彼はたいがいの場合かの花の色は白、そう純白だと思つてゐるのだが、時として彼女の心中の神秘的な世界は、黒や濃い

シクラメン

二年F組 神田寿子

紫色の花々に覆われて見えるのだった。そして、そんな時は必づ、花ばかりでなく、光は大地を照らさず、草や木にも明るい色が満ちてはいない、そう彼は思うのである。

二人は戸外に出た。彼女は英二の真横には並んでいない。ほんの半身ほど後を歩く。だから英二が彼女に話しかける時は、いつも振り返る様になる。今日は良い天気だ。路を行く全ての人々に声をかけたくなるようだ。芝を越えて遠くにある樹木の緑さえ、冷たく透明な空気を通して、はっきりと見える。英二は彼女とのたわいもない会話をそのたわいなさ故、むしろふさわしいと思つた。

第四章（最後の手紙）

あー自由な感情の飛翔にブライドとはなんと邪魔な存在だろう心が君の髪を腫を唇を、君の鮮やかなイメージを取らえようと、君の姿を追うのに、私の目は君にそっぽを向くばかり、現実の煩が胸を痛め、幻想の追求が吹雪となって私を苦しめる数知れぬ灰色の時間から、私を救えるのは君だけと信じてゐるのに、私の心の叫び声となって君の耳には遠くない。噴水のさざ波に写る、おぼろな輪郭の日が私の空漠に冷たく忍び込む。



シクラメンが腐った シクラメンは 私の生き写し、希望をかけていたのに
細かく震えながら土をなでる
私のはしが
ブス 下まで 下まで 通つて
しまった。
空っぽだ 空っぽだ

私は 私の未来も こうなるのかも
しれないと
感じた

それに比べると なんと希望をかけて
自分を考えていたことだろう
未来を 何の不安もなく見ていたことだろう

顔を植木鉢に 埋めた時

半分になってしまつて
白い舌のようなものや 透明の
細胞がある

そのシクラメンの球根から
古めかしい臭いが 漂つてきた

昭和四十五年度年間行事

行事（八月二日まで）

- ▽四月 八日 入学式。始業式
九日 一年オリエンテーション
一〇日 一年オリエンテーション
十一日 前期生徒会各種委員選挙
十二日 定期健康診断
十三日 定期健康診断
十四日 ツベルクリン反応検査
十五日 間接撮影
十六日 間接撮影
十七日 校外授業。スペイン美術展
十八日 前期生徒会役員立候補者
十九日 立会演説会
二十日 一、二年速足
二十一日 前期生徒会役員選挙
二十二日 第一学期中間考査
▽六月 一日 書記長立候補者立会演説会
二日 書記長選挙
六日 対戸山高校定期戦第一日
十三日 対戸山高校定期戦第二日
七月一〇日 生徒大会
九一一日 第一学期末考査
二〇日 終業式
二一日 夏季行事開始。一年館山臨海
- 七一二日 合同合宿
▽九月 一日 始業式
一六一八日 学年別水泳大会
二五二七日 学園祭
▽十月一〇日 運動会
二三二四日 第二学期中間考査
二九日 一、二年速足
▽十一月二七日 標準服化開始
▽十二月 二日 後期生徒会役員立候補者
立会演説会
三日 後期生徒会役員選挙
一六一八日 第二学期期末考査
二五日 終業式
二五三〇日 スキー教室
▽一月 八日 始業式
▽二月 五日 最首悟講演会
一〇日 強歩大会
▽三月 一日 合唱コンクール
一二二日 学年末考査
一四日 卒業式
二五日 終業式

新宿徒然草

昭和四十五年度

第四回新宿高校十大ニュース

- 服装自由化なる。
- 旧体育館のとりこわし
- 第二グラウンド整地
- 同窓会館建設進む
- 業間体操復活
- ト部さん、インターハイ優勝
- 強歩大会開かる
- 書記長、空席
- 文化委主催の講演会開かる
- 図書館にて書跡展を行なり
- 評価問題

編集後記

昨年の二の舞となっていました。何しろ、実際に活動したのは六人ほどなのです。従来のものとは違ったものにしよう、という事で構想をたてていったのですが、実際に活動していくうちに、しだいに従来どうりあるいはそれ以下のものとなってしまいました。期日がせまってくるにもかかわらず、原稿はいっこうに集まらず、最終的には、ごらんのように今までに発行された轍の中で最も薄いものとなってしまいました。

轍とは何なのでしょいか。本来、生徒一人一人によって作られるもので、編集委員はそのまとも役であるべきではないのでしょうか。轍の本来の姿、これをもう一度考えなおしてみるべきではないでしょうか。

編集委員

- 一B 中江 順
- 一D 小久保和子
- 一F 高城佳世子
- 一H 河村 厚夫
- 二A 岩下 明
- 二B 花井 達也
- 二B 佐藤 正貴
- 二C 三品 知之
- 二C 秋山 茂樹

発行者 東京都立新宿高等学校生徒会
編集者 轍編集委員会
発行所 東京都渋谷区千駄ヶ谷 六ノ二ノ一
発行責任者 岩下 明
印刷所 スピード・プリンター
千代田区須田町一ノ九
電話（二五一）九五五一